



巻 頭 言

福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校 校長 郡司 完

東日本大震災からの教育復興のシンボルとして開校した本校は、今年度で高等学校が8年目、中学校が4年目を迎えました。原子力災害からの復興を果たし、新たな地域社会を創造するグローバル・リーダーを育成するため、高校開校時に文部科学省から5年間、スーパー・グローバル・ハイスクール事業の指定を受け、その後、現在のグローバル型の事業に3年間取り組んできました。自治体や大学、NPO法人などを巻き込んだコンソーシアムの構築、地域課題の解決を図る探究活動を核としたカリキュラムの開発、グローバルな視野を育み福島の今を発信する海外研修を柱として、本校の建学の精神である変革者の育成を目指し、特色ある教育活動を展開してまいりました。

事業最終年度となる令和4年度は、新型コロナウイルス感染症の流行が収束には至らないものの感染症対策の強化と緩和により、活動の範囲を大きく拡大することができました。ニュージーランド・ドイツ・アメリカの他、宮城県・広島県・沖縄県など、国内外でのたくさんの研修を実施できたのは、大変意義深いことと思っております。加えて、北は青森、南は九州、さらにはベトナムなど、国内外の方が本校において研修を行い、さらに今年2月3日に開催しました事業報告会では、150名を超える多くの方にご参加いただき、事業成果の発表や参加者との交流などを行い、充実した時間と空間を共有することができました。コロナ禍での事業推進ではありましたが、多くの皆様のご支援とご協力のお陰で、特色ある取組を数多く実施し、無事に事業を締め括ることができました。

本事業において生徒たちは、地元の双葉郡を始め様々な地域に出向いて課題を見出し、解決に向けて300以上のプロジェクトに一人一人が思いを持って取り組みました。チアダンスで子どもと地域を元気にする取組や、プラスチックによる海洋汚染を地域から防ぐ取組など、その内容は様々です。これら生徒たちの主体的な学びは、学校生活にも良い変革をもたらし、今年度、生徒会が中心となって校則の見直しを行ったり、紛争で苦しむウクライナの子どもたちに手紙を届ける企画なども実施しました。震災から13年目に入っても、この地域には福島第一原子力発電所の燃料デブリの取り出しや処理水の海洋放出など、重く大きな課題が残されていますが、避難指示の解除や地元での学校再開、福島国際研究教育機構の開設など、復興の歩みは着実に進んでいます。ふたば未来学園では、それらに真摯に向き合いながら、地域課題に立ち向かう志と困難に負けないレジリエンス、社会をより良く変えていく変革者としての資質・能力の育成に取り組み、引き続き、生徒の学びと地域復興の相乗効果を目指して、これまでの実践を深化させ、新たな取組にも果敢に挑戦してまいります。

結びに、本書には事業の推進に臆することなく挑み続けた本校生徒と教職員の、活動の軌跡と成果や課題を包み隠すことなく掲載しています。事業を進めるに当たりご尽力を賜りました全ての皆様に、この場をお借りしまして心から感謝申し上げますとともに、本書が皆様のこれからの活動に少しでも役立ち、日本の教育の発展に僅かでも寄与できましたら幸いに存じます。

1. 1 研究開発概要（事業構想）

1 教育目標

① 管理機関における教育目標

ふたば未来学園中学校・高等学校は東日本大震災、福島第一原子力発電所の事故を受け、福島県双葉郡に平成 27 年に高等学校、平成 31 年に中学校が開校した。現在、双葉郡では原発の廃炉、地域コミュニティの再生、風評との闘いなど地域を分断する困難な課題が山積している。世界と協働しながらこれからの復興・地方創生を進めていく人材の育成が、この地域にとって喫緊の課題である。このため、グローバルな課題である原子力災害からの復興をテーマとして設定し、地域との協働による地域の課題解決に向けた探究・実践と海外研修を体系的に位置づけたカリキュラムを開発する。

② 学校の教育目標

本校は震災と原発事故により休校となった 5 校の伝統を引き継ぎ開校した。世界が経験したことのない困難な課題に直面した本地域の課題は、極端な少子高齢化や人口減少が進行する未来の全国の地域や、異なる立場や価値観を排斥する世界の分断と重なり合っている。本校は、こうした地域と世界の課題解決に貢献する人材を育成し、全国の学校や地域の変革を牽引する強い決意のもと、「新しい生き方、新しい社会の建設を目指し、地域や社会を舞台にして、これまでの価値観、社会のあり方と根本から見直し、自らを変革し、地域を変革し、社会を変革する『変革者』を育成する。」 【補足 1】

【補足 1】学校概要

東日本大震災及び福島第一原子力発電所の事故は、福島県、特に双葉郡とその近隣市町村に深刻な影響をもたらした。地域住民の避難が長期化するなか、教育環境の整備と震災を踏まえた諸課題に対応できる人材育成のため、「福島県双葉郡教育復興ビジョン」のもと、本校は平成 27 年 4 月に新設された。

本校は、募集停止となった双葉郡内の 5 つの高等学校の歴史と伝統、教育内容や特色を踏まえた幅広い学びを可能とした総合学科高校として、以下の 3 つの系列の科目群を設けている。

- ◇「アカデミック」系列：大学等上級学校に進学するために必要とされる主要教科を中心とした科目群
- ◇「トップアスリート」系列： トップアスリートや生涯スポーツ社会のリーダーとして活躍することを目指し、バドミントン、サッカー、野球、レスリングで高度な技術・理論を習得することを目的とした科目群
- ◇「スペシャリスト」系列： 農業、工業、商業、福祉の分野において地域を支える職業人として将来活躍するために必要な知識・技能を習得することを目的とした科目群

本校はふたば未来学園中学校も併設している。中学校は 6 年間を通した最先端のカリキュラムの中で、主体的・対話的で深い学び、グローバル教育、シティズンシップ教育の 3 つを中高一貫教育の柱に掲げ平成 31 年 4 月に開校した。

平成 27 年の開校当初、校舎は、広野町の本校舎、猪苗代町の猪苗代校舎（「トップアスリート」系列バドミントン生徒が在籍）、静岡県三島市の三島長陵校舎（JFA（日本サッカー協会）アカデミー福島生徒が在籍）の 3 つに分かれていた。平成 31 年 4 月に中学校が併設されると同時に広野町に新校舎が完成し、猪苗代校舎は閉鎖となった。現在は本校舎と三島長陵校舎の 2 校舎に生徒が在籍している。

在籍生徒数 (令和 5 年 1 月)	中学 1 年	中学 2 年	中学 3 年	中学 合計	高校 1 年	高校 2 年	高校 3 年	高校 合計
本校舎（広野町）	60	60	60	180	133	93	125	351
三島長陵校舎	-	-	-	-	5	23	20	48

2 構想の目的等

① 構想の目的

「原子力災害からの復興を果たすグローバル・リーダーの育成」として、これまで SGH で行ってきた研究成果の分析を生かしつつ発展させ、目的として以下を設定する。【補足2】

- A 地域での課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成し、自己の在り方生き方を見出すカリキュラムの開発
- B 原子力災害特有の課題に加え、全国・世界の課題が先行して生じている地域の特性を理解し、新たなコミュニティや産業を創造し、課題解決に貢献する人材の育成
- C 双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果の創出、及び全国の高校への波及

【補足2】 構想の目的と背景、求める地域人材

本校は平成27年の開校と同時にスーパーグローバルハイスクール（SGH）に指定され、「原子力災害からの復興を果たすグローバル・リーダーの育成」という構想のもと、これまで5年間研究開発を行ってきた。東日本大震災、福島第一原子力発電所事故が起きた地域に立地していることから、原子力災害からの地域復興に関する様々な活動を行ってきた。また通常教科・科目においてはアクティブラーニングの手法を積極的に導入し、グループワークやディスカッションなど生徒の主体的な取組を導入してきた。開校当初から SGH 指定となり、学校文化を作りながら研究開発も同時に進め、これまで以下のような成果が得られた。

- 「総合的な学習の時間」において地域の課題に向き合う活動を行い、課題の発見、課題の解決に向けた取組を学校全体で推進するような学校文化が形成された。
 - 本校の教育活動全体で育成すべき資質能力をまとめたルーブリックを作成し、これに基づいて評価を行うシステムの礎ができた。
 - 海外との連携先として、ドイツ、ニューヨークを選定し、現地の同世代の生徒と交流する場の形成、世界の課題を捉える取組づくりをすることができた。
- 一方で、以下の点が課題として明らかになってきた。
- 「総合的な学習の時間」は2年生から始まり、探究活動という視点からは1年生での取組が手薄となっている。1年生では、関連する教科・科目として「地域創造と人間生活」を履修している。ここでは学習指導要領に基づき職業観の育成や進路選択等を行い、さらに表現力育成のための演劇等を取り入れているものの、探究的な視点が欠けており、課題があった。
 - 探究活動における教員の指導方法について整理されておらず、教員個人の力量に任される部分が多かった。研究開発校として汎用的な指導法の開発を目指してきたところであるが、現在も道半ばである。
 - 海外研修について試行錯誤をしながら実りのある研修先や研修方法について検討してきたが、地域と世界の関係を深く考察するまでには至らなかった。
 - 福島県双葉郡復興ビジョンのもと、地域との緊密な連携を行いながら教育を行ってきたが、これまでには学校の開校が重視され、広域の地域連携については課題があった。

上記のような課題も踏まえ、また地域課題の解決に向けてさらに発展的な取組を加え、今回、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」（グローバル型）に申請することとした。構想の目的として、以降に示す達成目標と紐づけて、以下の3点を設定した。

- A 地域での課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成し、在り方生き方を見出すカリキュラムの開発（3年間を通して切れ目なく地域探究活動に取り組むカリキュラム、また地域課題とグローバル課題を効果的に往還するカリキュラムに関する研究開発）
- B 原子力災害特有の課題に加え、全国・世界の課題が先行して生じている地域の特性を理解し、新た

なコミュニティや産業を創造し、課題解決に貢献する人材の育成（調査研究ではなく、真の意味での課題解決に向けた実践を行うことのできる人材の育成を特に重視。また定量的評価に基づいた目標の設定を実施。）

- C 双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果の創出、及び全国の高校への波及（学校と地域の協働による、学びと地域活性化の相乗効果を創出、高校での探究活動を核とした学校文化と新たな地域の創造、探究活動における生徒と教員の関わり方に関する提案などを実施。）

② 求める地域人材像

本校は双葉地区教育長会が中心となってまとめた「福島県双葉郡教育復興ビジョン（25年7月）」が建学の礎となっており、同ビジョンにおいて地域が提起した求める人材像を踏まえつつ、本校開校後にルーブリックで人材像を具体化してきた。今後本ルーブリックを地域とのコンソーシアムにおいて主に下記の視点を重視し改訂していく。【巻末のルーブリック参照】

- 地域や世界の課題と自己の将来の夢とを重ね合わせ、当事者として行動する市民性
- 立場・価値観の違いによる深刻な分断や対立を止揚する、協働的ネットワーク構築力
- 地域の資源を見出した上で、知識や想像力を発揮し、地域に新たな価値を創造する力

3 達成目標（関連資料：「目標設定シート」）

① 定量的目標 ※卒業までに生徒に習得させる具体的能力を含む。

本構想の目的B、Cに関する達成の判断材料として、以下の定量的な目標を設定する。

- 本校では育成したい具体的な知識・スキル・人間性等をルーブリックにまとめ、10項目0（低）～5（高）のレベルで規定している。目標の最重要項目として「3年生最後のルーブリックレベル平均値で3.5以上」を掲げる。これまでレベル平均値は上がっているが、3.5という値は、挑戦的なレベルである。【巻末のルーブリック参照】
- 地域社会への還流を見据え、地域に貢献していく在り方生き方の目標として「卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上」という項目を掲げる。
- その他、最終年度で「地域と協働した課題探究プロジェクト50件以上」「協働する地域の方延べ200件以上」「来校する教育関係者等250名以上」を目標とする。【補足3】

② 定性的目標 ※卒業までに生徒に習得させる具体的能力を含む。

本構想の目的Bに関する、生徒に習得させる具体的能力は①定量的目標記載の通り。

目的A、Cに関する達成の判断材料としては、以下の目標を設定する。【補足3】

- 総合学科の入学年次必修科目「産業社会と人間」を学校設定科目「地域創造と人間生活（令和3年度より）」に代替し、困難な地域社会の現状とSociety5.0時代の変化を踏まえた能力と態度を養い自己の在り方生き方を見出すカリキュラムを開発する。
- 地域とグローバルな視点を重ね合わせた地域課題解決探究・学習モデルを構築する。
- 地域復興・創生における高校の役割と、「教育と復興の相乗効果創出」の必要性を踏まえ、双葉郡8町村との広域的・組織的・実働的な協働体制をコンソーシアムで確立し8町村を面的にカバーするとともに、地域協働の場・機会として校舎や探究発表会を活用し、生徒の探究を通じて地域住民主体のウェルビーイング実現を後押しする。

【補足3】 本構想の目的A、B、Cに紐づけて達成目標を以下の通り設定した。目的の内容を踏まえて、目的Aについては定性的目標を、目的Bについては定量的目標を、目標Cについては定量的目標と

定性的目標を設定した。また定量的目標については関連資料：「目標設定シート」に記載した。

目的A「地域での課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成し、在り方生き方を見出すカリキュラムの開発」に対する目標

総合学科の入学年次必履修科目「産業社会と人間」を学校設定科目「地域創造と人間生活（令和3年度より）」に代替し、困難な地域社会の現状と Society5.0 時代の変化を踏まえた能力と態度を養い、在り方生き方を見出すカリキュラムを開発する。また、2，3年次に履修する「総合的な探究の時間」において地域課題に向けた探究活動を行い、探究活動の効果的な進め方について整理する。探究活動を効果的に進めるための方策、例えば、探究活動ルーブリックの開発、探究段階に応じた教員の関わり方についての整理、探究段階に応じた発表会の設定等についてモデルを構築する。

また、地域とグローバルな視点を重ね合わせた地域課題解決探究・学習モデルを構築する。海外研修などを通じて生徒による地域探究活動と世界の課題事例との共通点を探り、本質的な課題解決に向けた取組を行う。また最近特に注目されている SDGs を紐付けたマップやエッセイの蓄積、海外来校者やアジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生の視点を生かした新たなアイデア創出等を行う。なお、アジア高校生架け橋プロジェクトによる留学生について、本校は平成30年度から受入れを行っており、令和4年度は2名の留学生が滞在している（これまで過去5年で6か国7名の実績）。

目的B「原子力災害特有の課題に加え、全国・世界の課題が先行して生じている地域の特性を理解し、新たなコミュニティや産業を創造し、課題解決に貢献する人材の育成」に対する目標

本校では教育活動を通じて育成したい具体的な資質能力をルーブリック（添付資料3）にまとめている。本校のルーブリックは知識、技能、人格、メタ認知といった学力概念のもと10項目あり、定性的に表現しているが、それをレベル0（低い）～5（高い）の数値で規定している。「0」は全く達成できていないレベル、「3」は教員が求める学校で達成してほしいレベル、「5」は「変革者」を達成できることが想定される極めて高いレベルである。ルーブリック評価は入学直後から卒業まで数回実施し、生徒の資質能力の伸長度合いを測定している。今回、定量的目標の最も重要な項目として、「3年生最後のルーブリック10項目（令和4年度より11項目）のレベル平均値で3.5以上」を掲げることとした。これまでの推移では年を経るごとにレベル平均値は上がっている（一期生（平成29年度卒業生）：1.99、二期生：2.63）が、3.5という値は実現できておらず、挑戦的なレベルである。なお、ルーブリック評価は自己評価であるが、客観性を高めるため、生徒同士によるピアレビューや教員との面談を試験的に実施しつつあり、本事業ではこの評価システムを確立する。

また地域社会への貢献についての目標として、「卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上」という項目を掲げる。本校では、高校卒業後、就職希望が30%程度、進学希望が70%程度である。就職希望の生徒はほとんどが地元就職するのに対し、進学希望の生徒のほとんどは地域外の大学等へ進学する。これはこの地域に高等教育機関がほぼないことが大きく影響している。そこで地域への貢献の指標として将来的な地域貢献への期待度を示すアンケートを取り上げることとした。地域に根差した探究活動を行うことにより地域の魅力を発掘し、将来、この地元に関わりたいと感じる生徒の割合は高くなることを確信している。

目的C「双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果の創出、及び全国の高校への波及」に対する目標

本校は、「福島県双葉郡教育復興ビジョン」のもと、地域との連携を重視して開校したが、これまでのネットワークを一層拡充し、教育と復興の相乗効果の創出のための地域協働体制を確立する。そのため

にコンソーシアムを組織的かつ実働的なネットワークとして機能させる仕組みを構築する。コンソーシアムでは8町村という広域での連携をカバーし、行政、民間、教育界といった幅広い業種による連携を目指す。本校が行う活動に協力をいただくだけでなく、連携側も本校の校舎を積極的に活用する等、学校を核とした多方向の連携、ネットワークの構築を目指す。

また、モデル校としての高等学校教育改革推進への波及に対する達成目標としては、多面的な定量的目標として、「保護者アンケートによる本事業への70%以上の肯定的評価」、事業への外部からの関心の度合いとして「視察、研修、発表会、聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数 250人以上」等を掲げることとした。さらに地域と連携を測る指標として「地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数 50件以上」、「本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間のべ件数 200件以上」を掲げることとした。

地域との協働による高等学校教育改革推進事業 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)
a	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を図るものとして、管理機関において設定した成果目標) 本校で規定する人材育成要件・ルーブリックレベルの3年次最終調査における平均値					単位： なし
	本事業対象生徒：		本校舎全校生	本校舎全校生	本校舎全校生	3.5
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：ルーブリック評価は年に2回程度定期的実施する。生徒の自己評価であるが、生徒同士のピアレビューや教員との面談などで客観性を高める。途中経過のチェックも可能であり、定量的評価として好適である。						
b	(高校卒業後の地元への定着状況を図るものとして、管理機関において設定した成果目標) 卒業時における、将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）や、本事業による自身の価値観への影響の肯定的意見の割合で70%以上					単位： %
	本事業対象生徒：		本校舎全校生	本校舎全校生	本校舎全校生	70
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：アンケートは生徒の自己評価であるが、理由も書かせるため信頼性は高い。進学する生徒もあり、定着状況は長期的な視点で地元への還流を見据えた指標として取り上げることとする。						
c	(その他本構想における取組の達成目標) 本事業に関する保護者アンケートによる肯定的意見の割合					単位： %
	本事業対象生徒：		本校舎全校生	本校舎全校生	本校舎全校生	70
	本事業対象生徒以外：					
目標設定の考え方：保護者を対象とした学校評価アンケートの中に本事業に関する項目を加えて、保護者による本事業に対する意識調査を行う。						

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(令和4年度)
a	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を図るものとして、管理機関において設定した活動指標) 地域の個人、団体との協働による課題探究プロジェクト数					単位： 件
	22	31	40	45	50	50
	目標設定の考え方：本件数は、地域の方々との連携の度合いを示す指標として好適である。全校生の1年間を対象とする					
b	(普及・促進に向けた取組の実施状況を図るものとして、管理機関において設定した活動指標) 視察、研修、発表会聴講等で来校する教育関係者、地域関係者等の人数					単位： 人
	調査なし	200(見込み)	200	230	250	250
	目標設定の考え方：来校者数は本校の注目度を表す指標となる。					
c	(その他本構想における取組の具体的指標) 生徒の外部発表、コンテスト応募件数					単位： 件
	調査なし	30(見込み)	35	40	45	45
	目標設定の考え方：外部発表、コンテスト応募件数は、本校の完成度の高いプロジェクト数の指標となる。					

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	目標値(年度)
a	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標) 本校の活動に関わっていただく地域の活動団体または個人の年間の件数					単位： 件
	133	150 (見込み)	165	180	200	200
目標設定の考え方：関わっていただく地域の団体の数はそのまま活動状況を表す指標となる。						
d	(その他本構想における取組の具体的指標)					単位：
目標設定の考え方：						

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度
全校生徒数（人）		421	440	463	480
本事業対象生徒数			381	403	420
本事業対象外生徒数			59	60	60

4 実施体制

(1) 管理機関及びコンソーシアムの実施体制

① 管理機関における実施体制や事業の管理方法

双葉地区の未来を創造するリーダーの育成を具現化するために、双葉郡8町村、高等教育機関、地域、産業界、NPO等がコンソーシアムを構築し、協働して双葉郡ならではの教育を推進するとともに、子どもたちの実践的な学びで地域を活性化し、教育と地域復興の相乗効果を生み出すことで、地域ならではの新しい価値を創造できる人材を育成する。また、管理機関独自の予算措置を行うとともに、事業をきめ細かく実施できるように教員の配置等の人的支援を行い、定期的に学校を訪問し事業の進捗を確認し、必要に応じ指導助言を行う。

② 運営指導委員会の構成（令和2年度より継続）

氏名	所属・職	備考
飯盛 義徳	慶應義塾大学総合政策学部教授	プラットフォームデザイン、地域イノベーション
田熊 美保	経済開発協力機構(OECD)教育局教育訓練政策課シニア政策アナリスト	教育政策国際比較、教育政策評価、Education2030
田村 学	國學院大學人間開発学部初等教育学科教授	総合的な探究の時間の指導、カリキュラム研究

③ コンソーシアムの体制（令和3年度の体制）

機関名	機関の代表者名
双葉郡教育復興ビジョン推進協議会（双葉郡浪江町教育長、双葉郡教育復興ビジョン推進協議会及び双葉地区教育長会 代表）	笠井 淳一
福島大学人間発達文化学類教授	中田 スウラ
公益社団法人福島相双復興推進機構（福島相双復興官民合同チーム） 専務理事	桜町 道雄

公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構 教育・人材育成部長	山内 正之
認定 NPO 法人カタリバ 双葉みらいラボ拠点長	横山 和毅
福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校長	柳沼 英樹
福島県教育委員会 教育次長	丹野 純一

④ コンソーシアムにおける実施体制や事業の管理方法

本校建学の礎である「福島県双葉郡教育復興ビジョン」推進のための「福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会」がこれまで定期的に開催され、管理機関及びふたば未来学園も参画している。同会議における全体ビジョンの検討と、学校における地域協働による個別の探究実践との間をつなぐ実働的な枠組みが求められており、コンソーシアムはこの役割を果たす。コンソーシアムは管理機関が統括し、本事業の方向性や人材育成要件の確認、カリキュラムへの助言、参画各機関の特性を活かした生徒の探究活動の支援を行う。

⑤ カリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員の配置や活用に関する計画

カリキュラム開発等専門家：長谷川勇紀氏（NPO 法人カタリバ双葉みらいラボ拠点長） 探究活動のカリキュラム策定や地域探究活動の効果的な進め方について助言をいただく。
 海外交流アドバイザー：島田智里氏（ニューヨーク市役所公園局都市計画&GIS スペシャリスト） 海外との連携について国際協働と地域開発の専門的観点から助言をいただく。
 地域協働学習支援員：平山勉氏（双葉郡未来会議 代表） 双葉郡 8 町村の住民主体の復興活動のハブとしての立場から、地域探究活動における連携先について助言をいただく。

⑥ 管理機関及びコンソーシアムにおける活動計画

	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月
管理機関	○活動計画の実施や教育課程特例取得に向けた指導助言	○第1回コンソーシアム協議会の開催（事業の進捗確認） ○第1回運営指導委員会の開催 ○教育課程特例の申請	○学校訪問による指導助言	○第2回コンソーシアム協議会の開催（成果の検証） ○第2回運営指導委員会の開催
コンソーシアム	○事業構想、人材育成要件、役割等の確認、共有 ○フィールドワーク・探究活動への人的支援	○生徒探究発表会への参加、広報、助言等 ○フィールドワーク・探究活動への人的支援	○フィールドワーク・探究活動への人的支援 ○地域協働における学校校舎の活用	○生徒中間発表会への参加、広報、助言等 ○フィールドワーク・探究活動への人的支援 ○地域協働における学校校舎の活用 ○1年間の総括

⑦ 事業終了後の取組計画（カリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員の配置・活用計画やコンソーシアムのコミュニティスクール化等を含む。）

本事業終了後についても、地域参画でカリキュラムの改善や地域協働の深化を継続するため、コンソーシアムの枠組みを維持することを検討する。また、カリキュラム開発等専門家や地域協働学習支援

員の協力を仰ぎながら、同様の事業を継続するとともに、両者の役割を一部でも教員が担えるよう、本事業実施期間内にノウハウの伝達を行い、地域協働の取組の持続可能性を高める。費用については引き続きの事業継続が可能となるよう管理機関において支援するとともに、地域から持続可能な体制の構築について助言をいただき、各種団体の助成金等を活用し自走できるようにしていく。

⑧ 学校と地域団体・大学等との連携協定の概要

- 双葉地区教育長会（双葉郡8町村）がまとめた「双葉郡教育復興ビジョン（25年）」に教育復興の方向性と本校開校の方向性が示され、現在も同会と継続的に協働している。
- ふたば未来学園と関係機関による協働コンソーシアム連携協定（令和2年度締結予定）

（2）学校の実施体制

① 学校における研究体制、教職員の役割、事業実施への支援体制等

- 本事業の企画運営を専門的に行う校務分掌として「企画研究開発部」を設置し、本校高校教員の1割程度を配置する。同部では、探究カリキュラム全体の企画立案および運営、地域との接続、国内研修、海外研修、外部講師との交渉、教員研修等を所管する。
- 地域との協働による探究活動は「全教員が担当」しつつ「数名のチーム」体制で指導にあたる。学校全体の探究活動の指導力を向上し教員意識を変革していくため、チーム内での週次会や、担当教員同士が課題を共有し解決策を検討する月次会を設定するとともに、全教員参加の研修会「未来研究会」を年間10回程度開催し、組織的な研究開発を進める。

② カリキュラム開発等専門家及び地域協働学習実施支援員の学校内における位置付け・役割、活用方法

- 各専門家・支援員を教職員の重要なパートナーとして位置づけ、校内にも専用の机を確保し、いつでも来校して担当教員と密接な連携・議論ができる環境を整える。
- カリキュラム開発専門家は企画研究開発部と週次の会合を行い、学校設定科目「地域創造と人間生活」、「総合的な探究の時間」、各教科における指導法等について検討する。
- 地域協働学習実施支援員は年間フィールドワーク計画や生徒の探究課題の方向性を共有し、地域の団体等との協働計画を協議するとともにコーディネートする。
- 海外交流アドバイザーは海外との連携に関して教員、生徒共に助言を行う。

③ 定期的な確認や成果の検証・評価等を通じた、究開発の進捗管理や改善の仕組み

- 各取組の際には生徒の「振り返り」を設定し、記述内容から成果・効果を検証する。
- 各学年で年2回、資質・能力のレベルを自己評価する「ルーブリック評価」を行い、能力伸長を測る。評価では自己評価の他に、生徒同士のピアレビューや教員とのルーブリック面談を実施する。これにより多面的な評価を実現するとともに、形成的評価として生徒自身が次の目標設定に向かう成長の機会とする。面談は全教員が担当する。
- 卒業時に「将来的な地域への貢献意識（社会との関わり）」のアンケートを行い、地域社会への還流を見据えたカリキュラムの効果と課題を検証する。R2年度入学生以降は入学時にもアンケートを行い、卒業時との意識変化も測定する。
- 全体の検証、評価は「企画研究開発部」が中心となって進め、全職員への報告・協議の機会を設けるとともに、コンソーシアム、運営指導委員会に報告し助言を頂く。

④ 学校における外部有識者等の支援・活用体制

- 運営指導委員：定期的に本事業に対する意見交換や指導をいただく。委員の専門性を活かして、カリキュラムの方向性、地域との協働における指導方法、有効な評価方法など、多面的な視点からの指導を仰ぐ。特に、世界的な教育の方向性、日本における探究活動やその評価方法等の議論を深める。
- アクセント・次世代教育・産官学民連携機構：人材育成に関する豊富なデータを必要に応じて提供いただきながら、ルーブリックをはじめとする本校の評価について、評価軸の立て方、データの見方考え方、評価のフィードバックと形成的評価への活用の在り方等について支援いただく。
- 発表会審査員：生徒の発表について大学、企業、NPO等の視点から意見をいただく。結果に対する意見やアドバイスだけでなく、その先の活動の進め方についても伴走者的な立場で協力をいただく。

⑤ これまでの教育課程等の研究開発の実績

年度	研究開発実績
平成 27～31 年度	スーパーグローバルハイスクール

5 研究開発計画及び内容

※関連資料：別紙様式3（前掲：ビジュアル資料）

① 研究開発構想名

原子力災害からの復興を果たし、新たな地域社会を創造するグローバル・リーダーの育成

② 研究開発の概要

- カリキュラム開発：全体の柱として学校設定科目「地域創造と人間生活」と「未来創造探究（総合的な探究の時間）」で3年間を貫き、地域課題解決の探究と海外研修を体系的に位置づけ、地域と世界の課題解決に貢献する資質・能力を育成するとともに地域に貢献する人材としての在り方生き方を涵養するカリキュラムを開発する。
- 地域課題解決に貢献する人材育成：地域・世界が直面する困難な課題を理解し、自らの在り方生き方を考え、また実践を重視した地域課題解決の探究を行い、その解決に貢献できる人材を育成する。
- 双葉郡との広域連携による教育と復興の相乗効果を創出し、全国へ発信する。【補足5】

③ 研究開発計画に対する仮説の分析及び事業実施より期待される効果

- 3年間を通じた「地域課題解決の探究カリキュラム」を構築することで、資質・能力の育成と、地域に根ざした在り方生き方の涵養をより深化することができる。これを一般化し、全国の高校の探究活動の活性化に繋げることが期待できる。
- 地域の課題と自らの在り方生き方を重ね合わせて思考しつつ、世界の課題に向き合う経験により、地域と世界の課題の共通性を見出し本質的な解決策を見出すことに繋がる。その上で課題解決の実践を行うことで、地域で新たな価値を創造する力が育成される。
- 高校と地域の広域連携モデルによって、生徒の姿が住民にも影響を与え、地域全体の課題意識や行動力が喚起され、創造的な地域を実現することが期待できる。 【補足5】

【補足5】 研究開発の内容、仮説の分析、期待される効果

○カリキュラム開発の内容

地域課題解決の探究活動を本校の教育活動の核とする。そのため教育課程の特例により「産業社会と人間」（1年次2単位）を新たな学校設定教科・科目「地域創造と人間生活」に代替した上で、「総合的な探究の時間」（2・3年次各3単位）と3年間を貫き、地域課題解決の探究活動を実施する。その際、

探究と各教科を意図的に往還させ、教科で身に付いたものの見方・考え方、知識・技能等が発揮され、汎用的な能力に高まっていくようカリキュラムを構造化する。

○カリキュラム開発における仮説の分析、期待される効果

・学校設定教科・科目の設置と教育課程の特例の活用

本校では現在、1年生で「地域創造と人間生活」（学校設定科目）（2単位）、2・3年生で「総合的な探究（学習）の時間」（各学年3単位）を実施している。これまで地域探究活動は主に「総合的な探究（学習）の時間」において実施しており、探究活動も年を経るごとに活発になっている。しかしながら1年次と2・3年次の間の接続に課題があった。具体的には、1年生で履修する「産業社会と人間」においては「高等学校教育の改革の推進に関する会議の第四次報告（H5）」に示された通り「職業と生活」「我が国の産業と社会の変化」「進路と自己実現」の3項目で構成し、特に「職業と生活」の指導事項として求められる「各種企業等の見学及び職業人等との対話を通して、職業の種類や特徴、職業生活などについて理解するとともに必要とされる能力・態度、望ましい勤労観、職業観を養うための学習」も実施してきた。一方で、2年次からの「総合的な探究の時間」では時代の変化を踏まえ、地域社会の課題解決に取り組む中から自らの在り方生き方を見出していく学習を行っている。H5年の報告ではある面で職業の種類や特徴は所与の固定的なものとして捉えられている一方、地域課題解決の探究においては産業や職業も自らが地域において創造していく対象の一部である。そのため、「産業社会と人間」では職業について学ぶ他に、新たな地域創造の活動を行っている先人に学ぶ単元を別途設定するなど重複も生じている上、実施してきたものが2・3年生の地域探究活動にあまり活かされていないという課題がある。この課題を解決するために時代の変化に適合させた形で「産業社会と人間」を再編成して「地域創造と人間生活」に代替することとし、地域での活動をより重視することとした。このようなカリキュラム編成にすることにより、3年間を通して地域課題に切れ目なく取り組むことができ、地域探究活動を現状以上に活性化させることができる（仮説）。さらに探究活動が活性化することにより、生徒の地域や実社会の課題に向かう意欲や行動力が喚起され、地域に根差した在り方生き方が涵養されることが期待できる（期待効果）。

・探究プロセスの確立

一般に探究活動は「調査」「課題発見」「テーマ設定」「課題解決」の各プロセスが挙げられ、これらを、PDCA サイクルを回して進めていくことが言われている。多くの探究プロセスで活用できるものの、実践しようとするとう漠然としているあまり、指導教員は戸惑うことが多かった。また「課題解決」の段階においては単なる調査研究で終わってしまうケースが多く、真に解決に至るケースは少なかった。また探究活動のステージに応じた生徒と教員の関わり方についても、これまでそれほど多くの関心を持たれてこなかった。そこで本事業では下表に示すような本校独自の探究プロセスや指導方法を構築する。

表 本事業で構築していく探究プロセスの概要（◎はその時期における主要な姿勢、関わり）

時期	1 年前期	1 年後期	2 年前期	2 年後期	3 年前期	3 年後期
探究段階	系列選択、職業観育成(産業社会と人間の内容)	調査のためのアクション 地域の現状分析		解決のためのアクションと考察 アクションー考察サイクル		まとめ 論文作成
生徒の探究姿勢	守(受容的)	◎守(受容的) 破(生成的)	守(受容的) ◎破(生成的)	守(受容的) 破(生成的) ◎離(自走的)	守(受容的) 破(生成的) ◎離(自走的)	守(受容的) 破(生成的) ◎離(自走的)
教員の関わり方	インストラクター	インストラクター	インストラクター ◎ファシリテーター	インストラクター ファシリテーター ◎メンター	インストラクター ファシリテーター ◎メンター	インストラクター ファシリテーター ◎メンター

具体的には探究の大枠として「調査のためのアクション」と「解決のためのアクション」を明確に分

けるプロセスである。いずれの段階も重要であるが、特に本事業では「解決のためのアクション」を重点化していく。また、これらの段階を明確に生徒に意識させるため、区切りとなる時期に発表会を実施し、対象生徒全員がそのステージをクリアしながら探究活動を進めていくようにする。また、生徒と教員の関わり方について、上記のステージに応じて、インストラクター的、ファシリテーター的、メンターの役割を担うことができるよう、整理をしていく。このような探究プロセスの明確化、特に「解決のためのアクションの重視」により、生徒が地域の課題としっかり向き合い課題解決にむけて着実に取り組むことができるようになる。また教員の関わり方を明確にすることにより教員の指導力向上や生徒の主体的な探究活動の質的な向上につながることを確信している（仮説）。さらにこの取組を一般化することにより、地域探究活動の進め方の先駆的事例として広く活用していただくことができれば、全国の地域探究活動の活性化につながることを期待できる。

○地域課題解決の探究の内容

1年生の学校設定教科・科目「地域創造と人間生活」では、「産業社会と人間」としての内容を実施しながら地域課題解決の探究の導入を行う。「産業社会と人間」の内容として具体的にフューチャーマッピングによるライフプラン作成、系列選択等を行い、職業観の育成、進路意識の高揚を図る。また地域課題解決の探究活動の導入として双葉郡の現状を知るフィールドワーク、マインドマップ等によるスキル学習、地域調査と演劇、グローバル課題に関するワーク等を実施する。

2、3年生では「総合的な探究（学習）の時間」において地域に関する課題探究活動を行う。地域の特性や特に重視すべき領域に焦点をあて、以下に示す6つのゼミを設置し、生徒の希望により振り分ける。その際、本校の系列（アカデミック系列、トップアスリート系列、スペシャリスト系列）についても考慮する。

原子力防災探究ゼミ	メディア・コミュニケーション探究ゼミ	再生可能エネルギー探究ゼミ
原子力発電所事故後の地域社会のあり方について探究する。廃炉の進め方や汚染水の処理方法等、事故後の様々な処理について地域がどのように関わらなければならないのか、避難や帰還の過程で生じた対立や分断をどのように解決するのか、避難により断絶してしまった地域コミュニティをどう復活させるべきか、といった課題に取り組み、解決に向けて実践する。	地域におけるメディア・コミュニケーションのあり方について探究する。誤解或いは意図的に加速させられている分断・対立を止揚する情報発信やコミュニケーション、災害時のメディアの効果的な活用方法、災害と巨災の教訓の発信と伝承などに向けて、メディアが果たす役割等について課題を設定し、その解決に向けて実践を行う。	歴史的に全国のエネルギー供給地であり、原発事故以降、特に再生可能エネルギーの研究開発拠点が集中する本地域の特性を活かし、再生可能エネルギーを中心としてエネルギー全般について探究する。科学的なアプローチのみならず社会的なアプローチでも考察し、望ましい人間社会と、地球環境やエネルギーの関係性について探究し、実践を行う。
アグリ・ビジネス探究ゼミ	スポーツと健康探究ゼミ	健康と福祉探究ゼミ
地域の復興を農業、商業の観点から探究する。地域資源を活用した新たな産業の創出、農山漁村の6次産業化など、ビジネスや生業の観点から探究し、実践を行う。特に地域の農水産物や商品について、風評の実態調査、その解決策、地域の食を活用したコミュニティ形成等について課題を設定し、その解決に向けて実践を行う。	Jレτζが所在しスポーツが身近な環境を活かし、スポーツを通じて地域を豊かにする方策を探究する。総合型地域クラブによる地域活性化、健康増進、子供のスポーツ環境支援、五輪を契機とした復興、スポーツビジネスによる持続可能で豊かな地域の実現や、アスリートとしての技術や体力向上に関する科学的見地からの探究と実践を行う。	少子高齢化や人口減少が一段と加速した福島の地域を全国の課題先進地域として捉え、健康長寿の実現の方策を探究する。中核病院・地域医療・介護・福祉が結びついた地域包括ケア、地域の高齢者・大人・子供などの多様な世代の共助による生きがいのある生活の創造等の課題を設定し、解決に向けて探究と実践を行う。

これらのゼミで扱う課題は双葉郡で特に重視すべき課題であるが、同時に世界的にも共通する課題である。地域に焦点をあてる一方で、世界でこれらの課題にどう向き合っているかという視点も加えながら、実践を進める。

ゼミでは生徒の探究ステージに応じて柔軟に指導し、生徒の主体性や行動力を育む。また探究ステージを明示し、調査研究に留まらず、課題解決のための実践を重視した取組を行う。

地域課題解決の探究活動については、本校舎（福島県広野町）の生徒全員を対象とする。本校には系

列が3つあり、多様な生徒がいるが、それぞれの系列の特徴を生かした活動が可能になるように工夫する。系列と関連したゼミを選択する場合、自分の専門分野を地域の課題と関連させ深く学ぶことができる。一方、系列に縛られず自由な発想でゼミを選択した場合においても、系列とゼミテーマを関連させながら、多様な見方考え方を獲得することが期待される。

○地域課題解決の探究における仮説の分析、期待される効果

震災、原発事故に見舞われた福島県双葉郡には復興に向けた意欲の高い方々や団体が多く、探究活動においてもこれらの方々と連携して取り組むことが多かった。また連携先は本校の位置する広野町が中心であった。しかし連携の在り方についてはいくつか課題が残った。具体的には、双葉郡8町村とは「双葉郡教育復興ビジョン推進協議会」における年複数回の協議の場でビジョンについては共有しているものの、具体的な地域協働については本校に委ねられており、連携の糸口が教員個人の繋がりに依存してきた点、連携が単発で一方向的な依頼になりがちな点、連携先との意思疎通が低い点（学校教育についての理解不足）、地域が近隣町村に偏りがちである点等である。これらを解決するために本事業ではコンソーシアムや地域協働学習実施支援員の活用、連携先の特性に応じた連携の在り方の整理をしていく。コンソーシアムは、連携の在り方についての議論を深めることを主目的とする。またコンソーシアムには双葉郡8町村に関わるメンバーにも加わっていただき、これまで以上に広域での活動を促進する。地域協働学習実施支援員については個々の取組についての適切な連携先についての情報提供をしていただく。これにより学校と連携先の組織的な繋がりが可能となり、また双方向の意思疎通がよりスムーズに運ぶようになり連携事業をより深化させることができる（仮説）。さらに地域連携が進展することにより、本校が目指している地域と学校の一体化が実現できると期待される（期待効果）。また、広域市町村を「地元＝立地」と捉えた高校を核とした地域活性化のモデルは、今後学校統廃合が進む全国の地域にとって、統廃合を契機として地域の活性化に繋げるモデルともなることが期待される。

○海外研修等の内容

原子力災害からの復興や持続可能な地域づくりを主要テーマとしたドイツ研修、ニューヨーク研修を行う。ドイツ研修では地域住民のまちづくりへの参画やエネルギーに対する考え方、ニューヨーク研修では持続可能な社会づくりと若者の役割について学ぶ。これらのテーマは地域的にも国際的にも共通する課題であり、同年代の生徒と深く議論する機会を設定する。なお、これらの研修は希望者を対象とするが、研修の成果は全生徒に波及するように工夫する。具体的には発表会の開催、SNSを通じた海外高校生との連携企画、地域課題解決の探究活動のテーマによる意見交換の機会の設定などが挙げられる。

また本校で受け入れている「アジア高校生架け橋プロジェクト」留学生やALTも活用し、異なる価値観の人たちと日常的に協働して探究活動を進めていく。

○海外研修等における仮説の分析、期待される効果

本校ではこれまでいくつかの海外研修を実施し、グローバルな視点を持ち行動力の高い生徒の育成に繋げてきた。海外研修にあたり、従来の位置づけ（グローバルな視点の獲得、外国語コミュニケーション力の育成、福島の現状報告）をより具体化、深化させ、以下のように位置付ける。

- ・地域課題と世界的な課題との共通性の発見から本質的な課題解決へ

本校で実施する地域課題解決の探究活動は6つのゼミに分かれて実施する。各テーマは地域に根差したものであるが、本質的には世界でも共通する課題である。例えば原子力防災探究ゼミでは原子力災害からの復興課題を掲げているが、天災人災を問わず、災害に対する適切な対応は、東日本大震災以降、特に注目されているところである。またメディアコミュニケーション探究ゼミで実施する課題には教訓を次世代に活かすことが大きなテーマとなっている。世界を揺るがす多くの事案の後には必ずこの課題

が伴っており、世界から学ぶところも大きい。生徒自身が自身のテーマを持って海外研修を行うことにより、自身のテーマの普遍性を学び、本質的な解決策への足がかりを得ることができる。また、単発の研修に終わらず、海外研修後の継続的な実践や議論に接続することが可能である。

・社会の構造的な課題

双葉郡は震災、原発事故により避難を余儀なくされ、一時は住民が誰もいなくなった地域であり、地域を初めから構築し直す経験をしてきた。この経験から住民のまちづくりへの参画の在り方については特に注目すべき点がある。ここには日本が抱える「少子高齢化」はもちろんのこと、多くの課題が山積している。一方で「一から」地域社会をつくるという観点からは、従来の施策に縛られない創造性豊かな未来を描くことも可能である。このような観点から世界の先進的な地域社会を学ぶことは非常に意味が大きい。海外では、住民と行政が一体でまちづくりを進めている事例が多く、これを学ぶことで自分たちが住む地においても、住民と行政が深く関わりながら課題に向かう取組に発展させることができる。

・異質からの学び

福島県は健康被害、食、観光等において未だに風評被害や差別に苦しんでいる。これらの本質の一つは、異質なものに対する違和感やイメージ先行の見方考え方にある。多民族が共存する海外は異質なものの宝庫であり、偏見・差別等の共通の課題をどう乗り越えていくのか多くを学ぶことができる。

・主体性の育成

これまでの海外研修経験者の様子から、研修実施後には主体性が大きく育まれていることが伺えた。この能力をさらに育成するために海外研修の在り方を再検討する。これまで教員側が様々な指示を与えながら実施してきたが、教員が担ってきた役割を極力生徒側に委譲し、生徒中心の研修運営を促進する。具体的には研修先の選定、事前研修、事後研修といった計画策定等が挙げられる。教員はファシリテーターとして生徒の運営をサポートする。また海外研修アドバイザーに生徒と積極的に関わっていただく。

④ 研究開発のスケジュール

ア 3か年の計画

年度	1年目	2年目	3年目
内容	【本事業の整備、運用】 ○コンソーシアムの立上と運営 ○カリキュラム整備 ○人材育成ルブリック改定 ○探究ルブリックの新たな策定と運用	【本事業の本格運用】 ○カリキュラムの確立 ○探究活動の定常化 ○ルブリックを活用した評価方法の確立 ○本事業の普及拡大	【本事業の総括と継承】 ○本事業の課題の抽出と対策の検討 ○継続的、発展的な活動に向けての環境整備 ○本事業の普及拡大

イ 令和4年度の計画

	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月
内容	1年：進路、職業選択、人間関係形成に関する活動 2年：地域探究の導入、ゼミ、テーマ探索 3年：地域探究（解決アクション）《全学年ルブリック評価》	1年：地域を知るためのフィールドワーク、演劇による地域の表現 2年：地域探究（ゼミ配属、テーマ探索） 3年：地域探究（まとめ、発表）、ルブリック評価	1年：国際理解活動、地域探究の導入、テーマ探索 2年：地域探究（テーマ決定、調査アクション）、ルブリック評価 3年：論文執筆《全学年学校評価》	1年：地域探究（ゼミ配属、テーマ探索）、ドイツ研修（希望者）、ルブリック評価 2年：地域探究（解決アクション）、ニューヨーク研修（希望者） 3年：論文完成

⑤ 地域との協働により実施する学習内容と教科・科目における位置付け、相互の関係

学校設定科目「地域創造と人間生活」と「総合的な探究の時間」で地域との協働による探究活動を行う際、探究と各教科を意図的に往還させ、教科で身に付いたものの見方・考え方、知識・技能等が発揮され、汎用的な能力に高まっていくことを目指し、教科の視点から知識を学ぶ単元も設ける。一方、各教科においても下記のように探究と接続した内容を取り扱い、教科を学ぶ意欲を喚起し発展的な知識の学習に繋げていく。【補足7】

例) 理科、数学：一次エネルギーのとらえ方、放射線とその減衰、地球温暖化、廃炉技術
 地歴公民：エネルギー供給地としての地域の歴史と背景、原子力災害と地域の未来

【補足7】 地域との協働により実施する学習は主に学校設定教科・科目「地域創造と人間生活」と「総合的な探究（学習）の時間」の探究活動で実施する。その際、学校全体の意識を統一するルーブリックの設定を始点としたカリキュラムマネジメントを重視していく。

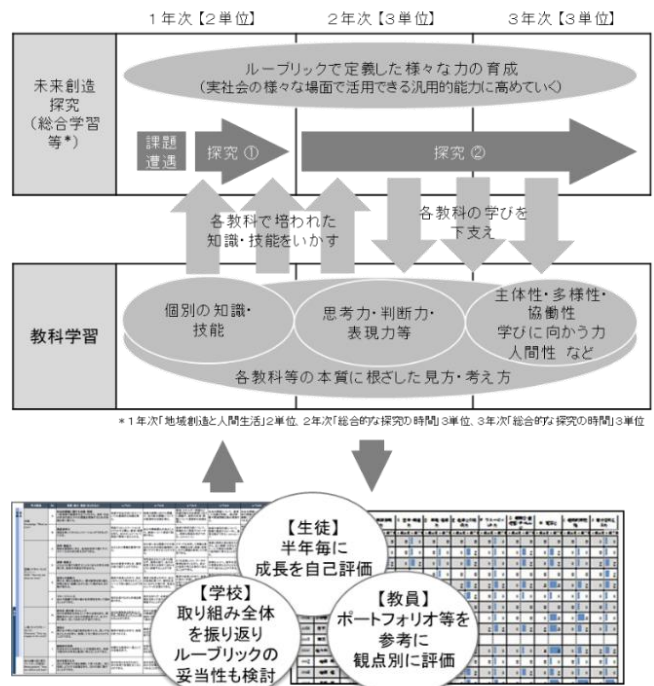
いずれの探究においても、各教科で身に付いた、ものの見方・考え方、知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性、学びに向かう力や人間性などが発揮され、本校がルーブリックで定義した汎用的な能力に高まっていくことを目指す。逆に、カリキュラム全体の軸となる探究があるからこそ、実社会での探究を通じて知識の必要性を痛感する体験等から各教科の学習の意欲が喚起され、各教科の学習活動が確かに下支えされていく。また、内容面に関する知識も、各教科において発展的に学習し、深められていく。

同時に、下記のように本校の全教科においても、地域と関連したテーマを扱っていく。

「地域創造と人間生活」と「総合的な探究（学習）の時間」における探究と各教科のつながりを意図的に生み出し、通常各教科・科目を探究活動と組み合わせることにより、各教科の学習も表面的な知識や技能の習得にとどまらない、より深い学習となる相互作用が期待できる。

また通常教科・科目において地域のテーマを扱う場合、複数の教科が連携して行う教科連携がより効果的である。教科連携を本校の教員研修「未来研究会」の重点的な取組の一つとして位置づけ、また強化期間を設定することにより、その推進を図る。

ふたば未来学園におけるカリキュラム・マネジメント



⑥ 他校や他地域への事業成果の普及方策

- 管理機関主催で全県立学校の教員が本校で研修を行い、各校への取組の普及を図る。
- 学校公開日を毎月設定し、本校への視察を積極的に受け入れ発信する。
- 学校ホームページに事業に関する報告や成果を掲載する。
- 生徒の地域課題解決の探究発表会を公開し、成果を発信する。
- 最終年度には教員による成果報告会を実施し、成果を総括し、その普及を図る。

6 学校設定教科・科目、教育課程の特例を活用した取組

① 学校設定教科・科目を設定	○
② 教育課程の特例を活用	○

学校設定教科・科目の設定に関する説明資料

学校設定教科・科目を適用する学校の管理機関	福島県教育委員会
学校設定教科・科目を設定する学校	福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

設定する学校設定教科・科目の内容

教科・科目名	地域創造と人間生活
単位数	2単位
対象学科・学年	1年次
必修修・選択の別	必修修
設定する教科・科目の内容	<p>1 目標</p> <p>地域や社会の変化を見通しながら、自己の在り方生き方を考える活動を通して、主体的に地域に参画し、新たな価値を創造するための資質・能力を次の通り育成することを目指す。</p> <p>ア 社会の変化の中で、主体的に新たな地域社会の創造に参画していく自覚と態度を養う。</p> <p>イ 地域や世界における産業の発展とそれがもたらした社会の変化を理解するとともに、多面的かつ協働的に考察し、望ましい地域社会と生活を創造していく能力を養う。</p> <p>ウ 自己の能力・適性、興味・関心等と地域や社会の未来を創造する上で求められる資質・能力を踏まえ、自己の夢と地域の課題を重ね合わせ、将来の生き方や進路について考察し、主体的に学び続ける能力と態度を養う。</p> <p>2 内容</p> <p>(1) 地域社会の創造へ参画していく自覚と態度の涵養</p> <p>地域を知る学習（双葉郡フィールドワーク）、地域人材インタビュー、国際理解講座等を通して、地域や世界で困難な課題解決に取り組んできた先人の生き方に触れる。</p> <p>(2) 地域社会を創造する力</p> <p>コミュニケーションワークショップ、スキル学習、地域課題の取材と演劇表現の創造を通して、複雑な地域課題を多面的に理解し、新たな地域を創造していく協働力や想像力等の基本的な技能や態度を養う。</p> <p>(3) 生き方と進路</p> <p>自己理解から職業人インタビューを通して、自己・地域・世界の未来を重ね合わせたライフプランを作成し、次年度の系列選択に繋げる。</p>
その他特記事項	教育課程の特例を活用して本科目を設定し、総合学科の原則履修科目として入学年次に履修させるものとされている「産業社会と人間」を代替する。

教育課程の特例に関する説明資料

教育課程の特例を適用する学校の管理機関	福島県教育委員会
教育課程の特例を活用する学校	福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校

教育課程の特例を活用して設定する科目の内容

科目名	地域創造と人間生活
単位数	2
対象学科・学年	総合学科・1年次
必履修・選択の別	必履修
特例を活用して設定する科目の内容	<p>(1) 目標 地域や社会の変化を見通しながら、自己の在り方生き方を考える活動を通して、主体的に地域に参画し、新たな価値を創造するための資質・能力を育成することを目指す。</p> <p>(2) 内容</p> <p>ア 地域でのフィールドワークやインタビュー等を通して、困難な課題解決に取り組んできた先人の生き方に触れ、社会の変化の中で主体的に新たな地域社会の創造に参画する自覚と態度を養う。</p> <p>イ 各種スキル学習や地域課題の取材と演劇表現の創造を通して、地域や世界における産業の発展とそれがもたらした社会の変化を理解するとともに、多面的かつ協働的に考察し、望ましい地域社会と生活を創造していく能力を養う。</p> <p>ウ 自己の能力・適性、興味・関心等と、地域や社会の未来を創造する上で求められる資質・能力を踏まえ、自己の夢と地域の課題を重ね合わせ、自己の将来の生き方や進路について考察し、主体的に学び続ける能力と態度を養う。</p>
代替措置	総合学科の原則履修科目として入学年次に履修させるものとされている「産業社会と人間」を本科目に代替する。
特例が必要な理由	<p>○「産業社会と人間」は総合学科の原則履修科目として入学年次に履修させるものとされ、高等学校教育の改革の推進に関する会議の第四次報告（H5）において具体的指導内容が提言され、各校にはこの内容に十分配慮した指導が求められているが、職業の種類や特徴、職業生活の理解等において、固定的な産業や職業が想定されている。</p> <p>○一方本校では Society5.0 の社会像と求められる人材像を踏まえ、地域社会において新たな価値を創造する人材の育成を構想しており、産業や職業は創造の対象の一部である。時代の変化に適合させた形で「産業社会と人間」を再編成することで、狙いを損なうことなく人材の育成がより確かになるため、代替が適当であると判断する。</p>
特例の適用範囲	令和3年度入学生から適用する。

研究
開発
構想名

原子力災害からの復興を果たし、新たな地域社会を創造する グローバル・リーダーの育成

目的

- 地域探究と海外研修を体系的に位置づけたカリキュラム開発
- 地域や世界の課題解決に挑戦する人材の育成
- 教育と復興の相乗効果の創出、全国の高校への波及

育成
人材像

- 地域や世界の課題と自己の夢とを重ね合わせ、当事者として行動する市民性
- 立場・価値観の違いによる分断や対立を止揚する協働的ネットワーク構築力
- 地域の資源を見出し、地域に新たな価値を創造する力

ふたば未来学園と双葉郡による広域協働コンソーシアム

- ◆ 県、ふたば未来学園中学校・高等学校と双葉郡8町村を中心とする広域コンソーシアムを構築。
- ◆ 生徒の実践的な学びで地域を活性化し、教育と地域復興の相乗効果を創出。



福島県立
ふたば未来学園中学校・高等学校

- ✓ 将来の地域ビジョン、ふたば未来学園で育成していく人材像の共有
- ✓ 上記に基づきふたば未来学園で展開する教育活動の企画・立案 等

3年間を通じた「地域課題解決の探究カリキュラム」の構築

- ✓ 学校設定科目「地域創造と人間生活」の設置。
- ✓ 課題解決のためのアクションを重視。
- ✓ 教員の関わりを含めた、汎用性のある探究活動指導方法の確立。
- ✓ 地域の特性を考慮した6つの探究ゼミでの実践。

原子力防災探究ゼミ

原子力発電所事故後の地域社会のあり方、廃炉と住民の関わり、地域コミュニティの復活について探究する。

メディア・コミュニケーション探究ゼミ

地域におけるメディア・コミュニケーションの効果的な活用方法、教訓を継承していくための方策について探究する。

再生可能エネルギー探究ゼミ

エネルギー供給地としての福島県の特性を踏まえ、エネルギーについて科学的、社会的なアプローチで探究する。

アグリ・ビジネス探究ゼミ

地域の現状をビジネスや生業の観点から調査し、風評払拭や新たな地域活性化の方策について探究する。

スポーツと健康探究ゼミ

Jヴィレッジの近隣という立地を活かし、スポーツを通じた地域活性化策や地域の健康増進策等について探究する。

福祉と健康探究ゼミ

少子高齢化の先進地域となっている双葉郡の地域性を活かし、地域の方が生きがいのある人生を送る方策について探究する。

海外研修等による地域と世界の課題解決

- ✓ 自身が取り組む地域課題解決の探究内容について、海外の同世代と議論。
- ✓ 地域課題とグローバル課題の往還による本質的な課題解決策の模索。
- ✓ 事前、事後研修も含めて、生徒が主体となった海外研修構築プロセスの確立。

1年次：ドイツ研修 フライブルク・ミュンヘン

住民の積極的な参画・関与によるまちづくりや再生可能エネルギーの活用について学び、今後の地域の在り方について考察する。
演劇やプレゼンによる福島の現状報告を行い、地域の理解を促進する。

2年次：米国研修 ニューヨーク、国連本部

「持続可能な社会づくり」をテーマに地球規模での課題について国際機関や世界の同世代と意見交換、議論を行う。
差別や対立・分断について米国の現状を学び乗り越える方策を探る。

2. 1. 1 課題を知る学習

本校の地域創造と人間生活は、①自分を知る、②地域を知る、③世界を知るという3つの柱でカリキュラム開発を行ってきた。①については自分史やマインドマップを用いた自己理解を通して、将来を見据えてありたい自分を考え、②では演劇を通して地域の課題を知る学習を行い、③ではイラクでエイドワーカーとして活躍する高遠菜穂子氏などの協力で、世界の課題を知り、自分、地域、世界をつなげ、2年次後半からの未来創造探究に繋げてきた。今年度は中高一貫生と高入生が合わさる初めての学年ということで、学びのバージョンアップを目指し、これまで高校2年次から実施していた探究を1年次の11月から実施し、演劇と探究の接続を丁寧に行った。

(1) 実施内容

① 地域創造と人間生活 オリエンテーション

入学者への課題として「自分史」を実施し、これから地域やそこで生きる人々と出会う前に自分のこれまでの人生を振り返った。覚えていないことについては家族に聞きながら記入することでせることで、家族との対話の時間を持つことができたという感想があった。オリエンテーションでは改めてこの学校が設立された経緯や、これから地域と出会う前のイントロダクションとして、双葉郡の紹介を丁寧に行った。

身に付けて欲しい力

目標

地域や社会の変化を見通しながら、**自己の在り方生き方を考える活動**を通して、**主体的に地域に参画し、新たな価値を創造**するための資質・能力を育成する。

社会の変化の中で、主体的に新たな地域社会の創造に参画していく自覚と態度を養う

地域社会の変化を多面的かつ協働的に考察し、望ましい地域社会と生活を創造していく

自己の夢と地域の課題を重ね合わせ、主体的に学び続ける能力と態度を養う

行程：

1号車 広野町

学校 ～ ぷらっとあっと ～ 新妻有機農園～ 箒平地区にて移住者との対話 ～ ひろの未来館（海洋ゴミでアクセサリをつくるWS） ～ 学校

2号車 檜葉町

学校 ～ 檜葉遠隔技術開発センター ～ レストラン岬 ～ みるーる天神 ～ 木戸川漁協 ～ J ヴィレッジ ～ 道の駅ならば ～ みんなの交流館ならば CANvas ～ 学校

3号車 富岡町

学校 ～ ふたばいんふお ～ 富岡高校 ～ 富岡沿岸部ツアー ～ さくらモール ～ とみおかアーカイブミュージアム ～ 学校

4号車 川内村

学校 ～ 川内村役場 ～ いわなの郷 ～ 草野心平記念館（天山文庫）～ 幻魚亭 ～ 上川内諏訪神社・長福寺 ～ 完全密封型野菜向上 KiMiDoRi ～ いちご工場 ～ 複合施設「ゆふね」～ 学校

5号車 双葉町・大熊町

学校 ～ 双葉高校 ～ 双葉郡内ツアー ～ 双葉町産業交流センター ～ 大熊町内ツアー ～ おおくまーと・喫茶レインボー ～ Linkの大熊～ 学校

6号車 浪江町

学校 ～ 福島ロボットテストフィールド ～ 道の駅なみえ ～ なりわい館工房（大堀相馬焼絵付け体験）～ 浪江町周辺 ～ 学校

7号車 葛尾村

学校 ～ ZICCA ～ かつらおやぎ広場がらがらどん ～ 葛尾大尽屋敷跡公園 ～ 葛尾村郷土文化保存伝習館～ 学校

② 双葉郡8町村バスツアー

日 時：6月14日（火）

講 師：

1号車	広野町	磯辺吉彦（広野わいわいプロジェクト）
		青木裕介（広野ぷらっとあっと）
		新妻良市（新妻有機農園）
		正木里奈（ワークショップ講師）
2号車	檜葉町	中井俊郎（JAEA）
		青木隆宏（一般社団法人ならばみらい）
3号車	富岡町	青木淑子（富岡町3.11を語る会）
		平山 勉（ふたばいんふお）
4号車	川内村	三瓶義浩（一般社団法人かわうちラボ）
		井出寿一（一般社団法人かわうちラボ）
5号車	双葉町	小泉良空 （一般社団法人ふたばプロジェクト）
		佐藤真喜子（一般社団法人まちづくりおおくま）
	大熊町	武内一司（喫茶レインボー）
		松永秀篤（熊川稚児鹿舞保存会）
6号車	浪江町	佐藤秀三
7号車	葛尾村	下枝浩徳（一般社団法人葛力創造舎）



概要：

双葉郡の現状と課題を実際に自分の目で見て、この地で学ぶ意味を考えるとともに今後の演劇及び探究活動につなげることを目的として、双葉郡8町村バスツアーを

毎年実施している。今回、8町村それぞれのバスツアー（大熊・双葉のみ1つにまとめて計7コース）を企画し、1日かけて双葉郡を歩いた。浪江高校、双葉高校、富岡高校を訪問した生徒達の中には、大震災から10年以上経つ現在でも、時がとまったままの校舎を見て言葉を失っている生徒もいた。

また、地域で生きる方々や、地域を盛り上げるために活動している方々とも直接交流ができたことで、今後の演劇創作や未来創造探究につながる学びとなった。本校には、福島県外出身者も多数在学している。事前に調べ学習を行い、実際に自分の足でその地を訪れた際に得る学びが深化したと考えられる。また、双葉郡出身者で、震災後避難して以来初めて故郷を訪れる生徒も一定数おり、バスの中から自分の家のあたりを必死で探す様子もみられた。震災以前とは様子の変わった町に驚く生徒もいたが、11年振りに故郷を見て様々なことを感じたようだ。バスツアー振り返りでは、こちらが想像したよりも生徒は多くの学びを得ていたようだ。

③夏休みプチ探究

夏休みの宿題として、プチ探究を実施した。右上の3つのコースから自分に合ったものを選んでもらった。成果物として、アクション結果をGoogle Formに入力することと、短い動画にまとめて提出してもらった。提出先は、生徒達でも携帯電話から簡単にアップできるよう、Flipgridを使用した。バスツアーを経て、双葉郡の気になる所について調べる者もいれば、純粋な自分の興味関心についてひたすら深掘りする者もいた。生徒達の得意とする動画を使った表現にしたことで、楽しみながら取り組むことができたようである。提出された動画はどれもクオリティが高く、生徒同士の知的好奇心をくすぐるものばかりとなった。夏休み明けには表彰式を実施し、ベストアクション賞、ベストクリエイター賞、ベストリサーチ賞、ファーストペンギン賞として14名の生徒を表彰し、景品として知育菓子を贈呈した。

3つから1つ選んでアクションプランを作ろう	
[A]	自分や誰かの困りごとを解決！ 「未来創造探究」先取りコース
[B]	興味あることをひたすら深掘り！ 「フカボリ探究」コース
[C]	とにかく助け！ 「ひたすらアクション」コース

◆ベストアクション賞

- 「県内・寿都高校生との交流を通して」
- 「宮城研修で震災遺構を訪れて」
- 「医療の仕事1日体験デー2022に参加して」
- 「福島の放射能問題や課題に対する取り組みについて」

◆ベストクリエイター賞

- 「ひとりバンド」

◆ベストリサーチ賞

- 「同調圧力について」
- 「テクノポップの歴史と音楽ジャンルの傾向の変化」
- 「夢日記からわかるわたしの真理」
- 「地域医療について」
- 「ドイツから学ぶ日本が多様性を受け入れる社会づくり

を行うにあたって」

「海外と日本の色彩感覚の差」

「人体への影響から考える1000万ボルトの本当の威力」

◆ファーストペンギン賞

「児童クラブボランティアに参加して」

「宮城県の震災遺構」



「医療の仕事1日体験」



↓「ドイツから学ぶ多様性を受け入れる社会づくり」



「福島の放射能問題や課題に対する取り組みについて」↑

生徒感想より

「プチ探究をやってみて調べてくる時に出てくる数々の記事が印象的でした。僕はプチ探究をやることは新しいことを知ることに加えて自分で何かをすることやどンドン気になることを調べたくなることだと気づきました。沢山のことを知ることによって自ら行動する気力を起こす事ができました。何かを調べることはとてもワクワクするので、他にも何か調べてみようかなあという気持ちになりました。」

「自分の好きなことや気になったことについて細かく調べてアクションを起こしたり、まとめられる時間を学校の課題として設けてもらえるのが嬉しく、楽しかったです。」

(2) 成果

昨年度と比較すれば、今年度はコロナ前のような活動ができた。同時にコロナ禍に普及したICTを活用して学びの共有を有効に行うこともできた。また、今年度はすでに探究で取り組みたい分野がハッキリしている生徒が多く、プチ探究で生徒たちの興味・関心を知ることができたことで、後半の未来創造探究のスタートアップでの面談等に大いに役立った。

(3) 課題と展望

1日かけてバスツアーを実施するようになり、1つの町村をじっくり体験することができるようになった。コースの打ち合わせなどの事前準備が大変ではあるが、その分生徒たちの学びは大きいので、引き続きそれぞれの地域をより深く学ぶ機会としていきたい。

2. 2. 1 探究オリエンテーション

2～3年次の「総合的な探究の時間」では、地域の問題の解決に向けた実践プロジェクトを創出する。本校で「未来創造探究」と呼ぶその授業において、生徒は自らの興味関心に従い、「原子力防災探究ゼミ」、「メディア・コミュニケーション探究ゼミ」、「再生可能エネルギー探究ゼミ」、「アグリ・ビジネス探究ゼミ」、「スポーツと健康探究ゼミ」、「健康と福祉探究ゼミ」の6つからひとつのゼミに所属して探究活動を行う。オリエンテーションでは自分の興味・関心（Will）や地域の課題（Need）について考えたうえで、ゼミ選択を行った。

（1）はじめに

本年度は「未来創造探究」の授業とは何か、目的は何かを入念に確認するところから始めた。そのうえで、探究テーマを決めるためのステップとして、「マインドマップ」「マンダラート」「50の問いづくり」のワークを実施した。テーマの決定とゼミ選択をスムーズに行うために、ゼミ担当者が作成した「ゼミマップ」を公開し、ゼミ決定前に探究担当者と生徒で面談を実施した。

（2）実施内容

「未来創造探究」の授業に入るにあたり、まずは高校1年次1年間の「地域創造と人間生活」の取り組みを振り返り、自分の考えを整理するところから始めた。探究活動はどのように進めていくのか、考えるべき地域社会とはどの範囲を指すのかを説明し、地域社会の課題探究とはすなわちそこにいる人間の課題探究であること、課題を解決することよりも課題を発見することが重要であることを確認した。これは探究テーマを支える「問いづくり」が今後のゼミ選択・探究活動に大きく関わってくるからである。

自分の興味・関心（Will）や地域の課題（Need）をうまく掛け合わせたマイキーワードを絞るために、まずは「マインドマップ」の手法を取った。そこから気になるいくつかのキーワードを選び「マンダラート」を用いてキーワードの解像度を上げていく。最後に問いを深められそうなキーワードから「50の問いづくり」を実施し、探究テーマにふさわしい課題設定を試みた。問いづくりはWhat（何を）やHow（どうやって）という疑問詞の視点だけでなく、定義説明（〇〇はどういう意味？）や事例（〇〇とは例えば？）という問いの視点、あるいはキーワード×学問分野など広い視点から問いを作るよう促した。

生徒の適切なゼミ選択のために、探究担当教員による「ゼミマップ」の作成を試みた。生徒が実施するマインドマップの活動への理解を深めつつ、担当教員各個人の個性を踏まえてゼミ内で展開できる活動のテーマやその

幅をキーワードで端的に示すことができた。生徒は自分のマイキーワードや問い、探究テーマと各ゼミマップの共通点を探しながらゼミ選択について考えることができた。そののち、自分の興味関心にに基づき、6ゼミ（「原子力防災探究ゼミ」、「メディア・コミュニケーション探究ゼミ」、「再生可能エネルギー探究ゼミ」、「アグリ・ビジネス探究ゼミ」、「健康と福祉探究ゼミ」、「スポーツと健康探究ゼミ」）の担当者と面談し、所属ゼミを決定していくという流れになる。

（3）成果

オリエンテーションとして未来創造探究の授業の意義、課題発見・問いづくりの重要性を確認したことで、問いづくりワークショップ、そしてゼミ選択へと円滑に進めることができた。また、担当者月次会での「ゼミマップ」作成は、生徒のゼミ選択に大きく貢献しただけでなく、生徒の探究活動に「教員も参加していく」という意識づけに大きな効果を発揮したと言える。

（4）課題と展望

ゴールデンウィーク期間中に「50の問いづくり」を完成させることを宿題とした結果、生徒によって出来具合がバラバラになってしまったが、ゼミ選択までのスケジュール上全体で十分なフォローができなかったこと、また、一度ワークシートに記入した50の問いを記録のために再度Googleフォームに入力させたことが、一部の生徒にとって問いづくりをより煩雑な作業と感じさせてしまい、重要性を伝えるためのオリエンテーションと逆効果になってしまった点があげられる。実際、ゼミ選択後も自分が決めたテーマに自信や展望が持てず面談を繰り返した生徒や、ゼミ移動を希望する生徒が出た。

加えて、今後は探究活動が行き詰まった時やテーマ設定に悩んだ時に振り替えることができる蓄積という側面でも、自分が過去に作成した「マインドマップ」や「問いづくり」ワークシートを有効活用できるような方法を確立できると良いのではないだろうか。

2. 2. 2 進路探究 キャリア学習

本校の「未来創造探究」は、火曜日の6・7校時と金曜日の3校時に設定されている。本年度の金曜日の授業は、進路に関する学習を中心に行われた。外部講師による入試・進路選択についての講話、志望理由書に関する講演会と作成、奨学金制度とは何か、といった講演、さらに次年度に行う予定のセルフエッセイ作成を通じ、自分の進路について深く考える時間とした。

(1) はじめに

今年度は火曜探究2時間と金曜探究1時間の連携・往還を深め、探究と進路ひいては教科学習の意欲が高まるよう、関係部署による連携を綿密に行った。

(2) 実施内容

前期（4月～9月）の前半は、まだゼミの所属や探究内容も明確ではないため、自らの興味関心と、それが地域・社会にどうかかわっていけるかという視点を中心に、テーマ設定・問い設定の助けとなるよう、授業内容を設定した。

例えば、社会科学的な視点からは、処理水の問題、メディア報道のあり方、過疎化・高齢化問題、自然科学的な視点からは主に放射線について理解を深め、それについて簡単な議論も行った。

また、前期の後半においては、探究に行き詰まる生徒も散見されたタイミングを見計らい、SDGsという観点で、全世界的な課題を復習しつつ、日本の課題の特徴を捉え、また、課題は独立して存在するのではなく、様々な問題と関連を持ちながら存在することに目を向けることで、視野を広く持たせ、より自分の興味関心のある課題について理解を深めるきっかけを作った。

後期（10月～）になると、生徒の探究テーマ・問いもある程度決まり始め、解決のためのアクションも少しずつ実践されるようになり、各生徒が自分なりの目標・方針を定めて進み始めた。そこで進路探究では、生徒の進路意識の向上を目指し、まずは志望理由書作成の講座受講、模試受験およびリライトによる文書作成を行った。四年制大学・専門学校進学希望者、就職希望者の全員がまず講演会を受講し、志望理由書がなぜ必要なのか、どのような書き方をすればよいか、と言った入門期の指導をした頂いた。その後、志望理由書の作成に入るが志望校を作成までに絞り、パンフレットなどの資料を取り寄せる等の事前準備を生徒に行わせ、進路意識を自らに引き寄せられるようにした。また業者が提供する自己診断適性検査の結果も参考にし、自分の適性（コンピテンシ

一）・長所等を客観的に見つめることで、深い自己理解に努めさせた。

同時期に「奨学金制度」に関する講演会も開催し、奨学金制度についての理解を深めさせるのと同時に、自らの進路が決定しなければ奨学金も志望理由書も動き出せない、ということを生徒に周知した。

今後、前年度は後期の後半（1・2月）に取り組んでいたセルフ・エッセイを3年次の前期に取り組む予定である。これまでの進路についての知識をベースとしつつ、より明確にしていくことを目的としている。セルフエッセイとは主に探究活動を通じた自分なりの生き方・在り方について、「書き手自身の個人的な知識や体験を基にし、読み手を説得するような、自分なりの意見を所定の書式に従って書くもの」である。進路意識の向上と、3年次4月の中間発表会を終え進路も含めた探究活動への本格的始動に位置付け、この時期の実施とした。

(3) 成果

火曜日6・7校時との連動を毎回意識したカリキュラム・マネジメントができた。また、進路探究の一つ一つの行事（講演等）を集中的に行ったため、各分野の講演が生徒の中で結びつき、継続的に進路について考える機会となった。

(4) 課題と展望

探究活動と進路活動の連携は、これまで通りの課題と言える。探究の内容と進路が必ずしも合致するとは言えないため、それぞれの担当者が情報を共有し、金曜日3校時と火曜日6・7校時の取り組みが、より進路に向けて効果的になされることが望ましいだろう。進路希望を把握している担任と、専門的な観点から探究内容を把握しているゼミ担当者とは、縦と横で紡ぐ網の目のように生徒理解に努めていくことは、大きな化学変化をもたらす可能性に満ちているため、このつながりを多く作ることができるような戦略を様々な場面で考えていくことが重要であろう。

2. 4. 3 原子力防災ゼミ

原子力防災探究ゼミ（以下原防ゼミ）は原子力発電所事故によって毀損された地域コミュニティの再生や、3.11の経験の伝承を考察することを目的としている。しかし近年は生徒の直接的な震災の記憶が薄くなっているためか、ゼミを選択してきた生徒の興味・関心、課題の捉え方は必ずしもゼミ本来の目的とは合致せず、直接的に原発事故をテーマとする者は少なくなっている。

(1) はじめに

七期生は2011年3月の段階で彼らは幼稚園の年中に在籍していた世代である。本ゼミには11名（女子5名、男子6名）が参加し、7プロジェクトが進行している。

(2) 実施内容

生徒個々の興味関心に基づいてテーマを設定したため教員側からの一斉講義形式でのインプットはあまり行わず、基本的に生徒の活動に対する教員のフォローは個別に行っている。生徒ごとの担当教員も設定していない。毎回授業のはじめに全体で各プロジェクトの進捗とその時間の活動を確認する時間をとっている。

(3) 生徒のプロジェクトと活動内容

「なぜ海洋放出に反対運動が起こるのか？」

アカデミック理系女子の単独プロジェクトである。昨年度、放射線ワークショップを受けて、廃炉と海洋放出の問題について関心を持った。広島研修（詳細は本誌2.4.3を参考）にも参加し、事前研修の1F地域塾で廃炉の諸問題と未来の展望について考察した。



福島大学前川直哉先生の「東日本大震災の心理的影響」について講義受講、松谷彰夫『裁かれなかった原発神話』読了をへて、処理水放出に住民が納得していないという問題に関心を持ち、海洋放出反対運動と過去の原発建設反対運動の比較を試みた。数字の面と気持ちの面との乖離が見られるトランス・サイエンスの問題を考察するべく、いわき市久之浜で漁師をされている新妻竹彦さんにインタビューを行った。



インタビューの内容は右のQRコード先書き起こしをしている。今後の予定として茨城県の漁師さんへのインタビューを考えている。



「フードロスをなくすためには？」

トップアスリートの男子3名、商業系列の男子1名による共同プロジェクトである。当初はテレビ番組の企画を参考に「捨てられる野菜を集めて0円食堂」をテーマに掲げていたが、より深化させてフードロスをテーマに掲げた。町内の「お食事処ふたば」を訪問し、フードロスを押さえるための工夫を聞くとともに食事動画を撮影、担当教員の手つてにより福島放送「シェア」のコーナーで自分たちの活動を放送してもらった。動画は番組のYouTubeチャンネルにアップロードされている。リンクは右のQRコードより。



「古着を利用してなにができるか？」

ファストファッションはなぜ安いのか？ という関心から古着のアップサイクルについて考えるともに2022年8月27日の朝日新聞記事「古着の山 先進国がおしつけ」を読んでリサイクルの偽善性という視点にも気づけた。身近な古着である「クラスTシャツ」に着目し、過去のクラスTシャツがどうなっているか、今後のクラスTシャツをどうするか高2・3にアンケートをおこなった。現在は海洋後についても関心を広げている。

「多頭飼育崩壊について」

女子による単独プロジェクトである。自身もネコを飼っており、広野町にノラネコが多いことから関心を持った。2022年9月11日朝日新聞で広野と富岡のノラネコの記事をもとに広野町社会福祉協議会の根本さんに取材をおこなった。これにより広野町のノラネコ問題の背景にも震災の影響があることを知った(詳細はQRコードのリンクへ)。その後多頭飼いに至った広野町のHさん(昭和16年生まれ、81才)に話を聞いた。



「3.11は僕らにどんな問いを投げかけたのか？」

社会科教師を目指す男子の単独プロジェクトである。震災の記憶がない中学生に震災のことを伝える授業をしたいと考え、母校である小名浜二中の教員とのやり取りで授業をさせてもらえるよう交渉した。立命館大学産業社会学部現代社会学科の丹波史紀先生のミニ講義「原子力災害は地域に何をもちたか」を視聴して授業案を練っている。

中学生の政治的関心を高めたいとも考えており、10月18日に県の選挙管理委員の依頼を受け町内のイオンに赴き、お客さんに投票呼びかけグッズを配布した。

現在は授業案をつくり、ゼミ仲間へまず授業を試みることを目指す。

「富岡に写真を通じて何が出来るか？」

女子二人によるプロジェクト。3.11前後の写真を集めて比較し、問題点を読みとっていくプロジェクトである。とみおかアーカイブミュージアムを訪れ過去の写真を入手しようとしたが挫折。テーマを子どもの貧困に方針転換し、広野町のこども家庭課の職員に話を聞いた。



「神社ではどのような交流が行われ、生活にどのように影響を与えているか？」

女子による単独プロジェクト。双葉町の交流人口を増やすために、地域の中心にあった初發神社を核とした交流を起案した。宮司さんや町議員の山根さんに取材をし、町のイベントに参加した。



2022年に町に人が住めるようになり、駅西住宅が建設された。入居者の半数は以前住んでなかった人なので、情報を発信する必要を感じ、双葉町を紹介するホームページも作成した(右QRコード)。



2. 2. 3 メディア・コミュニケーション探究ゼミ

メディア・コミュニケーション探究ゼミ（以下メディアゼミ）は、双葉郡を中心とした地域が抱える課題を踏まえ、海外を含めた特定の地域社会に属する人々への情報の発信や、コミュニケーションの有効な方策について探究し、その解決に寄与することを目的としている。

メディアゼミを構成するメンバーは2022年2月現在22名（女子11名、男子11名）となっている。一人で活動に取り組む15のプロジェクトと、テーマの近いもの同士でグループを形成して活動に取り組む3つのプロジェクトが、各々のペースで探究活動に励んでいる。

(1) はじめに

7期生は震災当時4～5歳の未就学児であり、震災に関する記憶も定かでなく、被害状況や震災に関わる諸問題については本校入学後に初めて知ったという生徒も少なくない。生徒のテーマ設定は震災に関する直接的な課題にとどまらず、世界的な課題（海洋ゴミやフードロス）や、身の回りの課題（学校生活、自己表現）への関心も高く、これまで以上に多岐に渡っていると言える。

メディアゼミに所属する生徒の探究テーマも、震災・原発事故からの復興や風評被害の払拭といったテーマを始め、福島の魅力の開発・発信や、他地域も抱える課題に対し双葉郡を活用して解決に取り組むなど、多様なテーマが設定されている。



今年度も新型コロナウイルスによる活動の制限が懸念されたが、例年と比較すると感染状況は落ち着きを見せており、実際に現場に足を運び、様々な人間と関わりあう機会にも恵まれた。地域社会と関わる貴重な体験を通して、探究テーマについて深く考察・分析し、活動の質を高めしていくことが目下の目標となっている。

(2) 実施内容

担当者間で作成したゼミマップを提示することで、生徒のマイキーワード・問いを関連付けやすくした。



調査のアクションについては、夏季休暇明けまでに必ず一度以上一次情報を集めることを目標に指導を行った。一部の生徒は全校生あるいは同学年の生徒を対象としたGoogle Formによるアンケートの手法を取ったが、オンラインイベントへの参加や現地での取材を試みる生徒も見られた。2名の生徒が海外への短期留学の機会があり、探究に関連する質問を現地で調査した。夏季休業明けのゼミ内報告会では4人程度の小グループを編成し、調査のアクションの取り組みや結果について共有し合った。



調査のアクションの段階で生徒ごとの探究活動の進捗の差が顕著に出始めたことで、担当教員による毎週の定例ミーティングでの情報共有・進捗確認を通して、生徒を複数のグループに分割して指導する方針をとった。「アクションの進捗」と「一人で活動を進めるスキルがどの程度あるか（活動が一人で進めやすい段階であるか）」の2つの軸で生徒を分け、1グループに一人教員を配置して指導にあたった。この手法は改良を加えながら現在も継続して採用している。

10月25日のプレ発表会に向けて、生徒の探究テーマと調査内容から「地域社会のあるべき姿」を想定し解決すべき課題を見出すワークを通して、「課題解決のためのアクション」に取り掛かる生徒が少しずつ出始めた。具体的なアクションとしては、校内で小規模のイベントやワークショップを開催する、自分で作品を制作する、実験を繰り返す、実際に他者とコミュニケーションを取る、双葉郡の施設と協働しイベントの手伝いをしようとする、などが見られた。プレ発表会での発表とアドバイスを通して、多くの生徒が課題解決のためのアクションを進めている。

(3) 成果

【A：社会的課題に関する知識・理解】

調査のアクションとして施設を訪れたり、アンケートを取ったりする活動を通して、多くの生徒が社会的課題に関する知識がまだまだ足りていない、想像と実際が異なるということ学ぶことができたようだ。

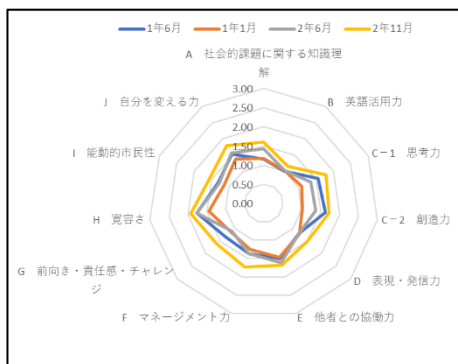
【D：表現・発信力】

特筆すべき成果の一つとして、メディアゼミからは4人の生徒がマイプロジェクトアワード福島県 Summit（オンライン）へ出場した。自らの探究の内容を他校の生徒やアドバイザーに向けて発表し、対話を通して考察を深めた。このような外部での発表の機会は、発表の仕方やスライドの見せ方を工夫する契機となるだけでなく、普段はなかなか話せない相手とコミュニケーションを取ることにつながるため、今後も機会を逃さず挑戦し続けてほしい。

【F：マネージメント力】

普通の教科の授業等ではなかなか発揮状況を確認したり評価したりする機会が少ないのが、マネージメント力（自己管理能力）である。1人で進めているプロジェクトと複数人で進めているプロジェクトでは、マネージメント力として求められる要素に多少の違いはあるが、教員やカタリバスタッフの助けがないとなかなか活動を進められない者もいれば、一度やり方を覚えてしまえばどんどん活動を進められる者もいる。本ゼミ担当者間ではこのマネージメント力をひとつの軸として生徒の伴走方法を考えていたこともあり、生徒が今指示を必要としているのか、何をすべきかを一緒に考えたり意見を聞き出したりする必要があるか、という点には特に注意を払って指導を行ってきた。実際、7期生の2年次11月時点のルーブリック自己評価では、6月時と比べてC-1思考力、Fマネージメント力、G前向き・責任感・チャレンジが大きく伸びていることがわかる。

	2年6月	2年11月
A	1.43	1.60
B	1.02	1.15
C-1	1.35	1.79
C-2	1.38	1.72
D	1.22	1.51
E	1.61	1.68
F	1.37	1.74
G	1.11	1.62
H	1.77	1.92
I	1.28	1.55
J	1.56	1.79
平均	1.37	1.64



【G：前向き・責任感・チャレンジ】

探究活動を進める中で、前述のルーブリックの結果の通り、生徒の前向きな態度やチャレンジ精神にも大きな成長が見られたと言える。数々の発表や対話の機会を通して、自分の考えを他者に伝えることへの抵抗感が薄れ、地域の方々と積極的に関わろうとする態度が育まれた。



(4) 課題と展望

【C-1：思考力】

ルーブリック評価では高い数値の伸びを見せているのがこの思考力であるが、ゼミ活動を通してみると、アクションの結果に対する考察や分析がまだ十分でないと思われる。一度出た結果や自分にとって都合の良いデータを疑ってみる批判的思考力に欠ける部分が見られ、今後の指導が肝要である。

【J：自分を変える力】

活動に全力で取り組んだり、あきらめずに遂行する前向きさは認められるが、自分の将来の目標や進路に関連付けて活動を進め、目標と現実の差を見つめたり、自省するということにかけてはまだ成長の余地があるように感じる。来年度は高校3年次になり、探究活動もいよいよ後半に差し掛かってくるからこそ、現状維持ではなく、自分に足りない部分に真摯に向き合って振り返り、自分を変えていく力が養われていくよう、生徒に寄り添って探究活動を進めていきたい。



2. 2. 3 再生可能エネルギー探究ゼミ

福島県では、2011年3月に「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」を策定したまさにそのとき、東日本大震災とそれに伴う東京電力第一原子力発電所事故によって再生可能エネルギーを取り巻く情勢が激変した。そこで福島県では新たな再生可能エネルギー推進ビジョンとして震災以降の社会情勢も反映させた「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」を2012年3月に策定し、復興の主要施策の1つとした。このビジョンには原子力に依存しない、安全・安心で持続的に発展可能な社会を目指した福島の再生可能エネルギー産業の未来像が描かれている。

本校の再生可能エネルギー探究ゼミでは、「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」をもとに福島県や双葉郡の現状を把握し、課題を見いだすことで解決の糸口を探究することが一般的な進め方であるが、私達は探究の動機付けとして学校周辺の産業や自然環境に着目し、フィールドワークや基礎実験などの演習を全員で行い、基礎知識や体験の共有化を行った。

(1)はじめに

再生可能エネルギー探究ゼミでは生徒10名が協力しながら探究活動を進めてきた。全体の活動としては、広野海岸の清掃活動、浅見川の清掃活動・水質調査、請戸漁協訪問など、様々な取り組みを行ってきた。また、グループごとに7つの探究テーマを設定し、探究活動を進めてきた。

(2)実施内容

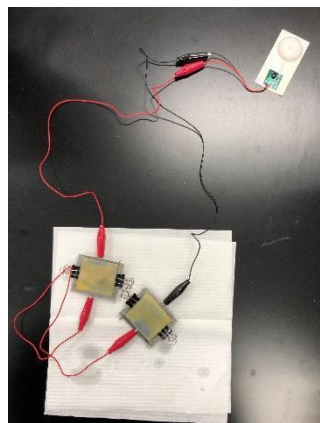
①テーマ：色素電池

地元である川内村の自然を壊さずに発電できる方法はないかという考えからこの探究活動を始めた。

「色素増感太陽電池」という発電方法を使って実験をしている。電気の循環発電の可能性があること、デザインによってはインテリアとして活用できる可能性があることに着目している。

本格的な実験の準備として、2つの活動を行った。1つ目は、専用キットを用いた色素実験である。実際に電気が流れているか確認するためにオルゴールを使用し、小音ではあったが音を確認することができた。2つ目は、川内村へのフィールドワークである。色素を抽出するためにどのような野菜等を用いるとよいかをインタビューしたり、実際に野菜等をいただけないか交渉したりした。

今後は、野菜等から色素を抽出し、実験を本格的に進めていく。



②テーマ：川内村の魅力を発信！

幼い頃から川内村の自然に囲まれて生活してきた。村の自然に親しみを持ち、どのようにして守られているのかを調べ、その魅力を広めたいと考えている。また、川内村で感じることでできる人と人の繋がりや温かさをもっと広めていきたい、とも考えている。「川内村の自然に触れて楽しむエコツーリズムを通して村の人と出会い交流し、そこから村は活性化するのか？」という仮説を立てて活動している。

具体的には、自然環境保全について調べたり、川内村出身の天山文庫管理人をしている志賀風夏さんに話を伺いに行ったりした。また、ツアーで実際に訪れたい場所の下見をし、川内村で活動される方の話を伺ったり、実際にツアーをする上での注意点を確認したりすることができた。

今後は、川内村の地図におすすめスポットなどを書き込む活動を計画している。そのために、村でお店を営んでいる方に話を伺い、おすすめスポットを調査する予定である。

③テーマ：人と海の関わり

津波が社会や自然に与える影響について調べていくなかで、海洋教育・防災教育という言葉を知った。もともと海に興味を持っていたこともあり、今はそれらについて調べている。

現在まで行った活動は4つ。1つ目は、施設見学である。請戸小学校、コミュタン福島、伝承館等を訪れ、震災や放射線に関する基礎的な知識を身につけた。2つ目は、寮の指導員の方へのインタビューである。寮における災害時マニュアルを見せていただき、避難経路のパターンや過去の災害時の対応について詳しくお聞きした。3つ目は、アクアマリンふくしまの岩田雅光さんへのインタビューである。海に恐怖心を持っている人の特徴についてお話を伺った。最後に、日本科学未来館のサイエンスコミュニケーターである中野夏海さんへのインタビューである。日本科学未来館での取り組みや海洋教育について教えていただいた。

今後は「子どもへの海洋教育」を主軸にイベント

等の実施を検討している。また、いわき市で海洋教育に力を入れている方にもインタビューの依頼を予定している。

④テーマ：福島の魚

釣り好きな仲間が集まったので、テーマを「福島の魚」とし、処理水問題と関連して探究している。漁業の状況が急激に悪化した。2018年に漁業が再開されたものの、ネット上では「危険」「命が危ない」「食べる気がしない」など、否定的な意見も少なからず見受けられる。こうした状況を払拭するため福島の魚の知名度と安全性を発信したい。

その第一歩として、福島の魚を皮膚感覚でとらえるために、富岡漁港と請戸漁港を訪問した。幸運にも富岡漁港では釣り船でヒラメ釣りをするという貴重な体験をした。結果は衝撃的なものであった。なぜこんなにも巨大なヒラメが入り食い状態で釣れるのか。海底は震災後どのような状態になっているのだろうか。船長さんのインタビューからたくさんのヒントを頂いた。さらに偶然乗船していたアクアマリンの職員の方より科学的な視点からの海洋汚染の現状と未来についてのお話を聞き、自分ごととして「福島の魚」を考えるきっかけとなった。請戸漁港では魚市場の見学と漁協の職員の方とのディスカッションを通して「福島の魚」の話はもちろん、ウニの磯焼けや海洋ゴミ、未利用魚問題、そして処理水問題など様々なテーマを深く掘り下げることができた。これらの学びをさらに発展させて次のアクションへと向かうことが私たちの使命である。



⑤テーマ：「海藻を呼び戻すために」

2009年に国連環境計画（UNEP）が出した、ここ十数年の比較的新しい概念「ブルーカーボン」を知っているだろうか。地球温暖化の原因といわれる温室効果ガス、その中でも最も存在量の多い二酸化炭素を陸地にある植物が光合成によって減らしてくれている「グリーンカーボン」ということは広く知られているが、それに対し海が減らしてくれるというのが「ブルーカーボン」で、海草藻場、海藻藻場、干潟、湿地、マングローブ林などのことである。これらは世界中の海の面積のたった 0.2%しかないが、海全体で吸収する二酸化炭素の 50%を占めている。ウニで磯焼け（ウニが異常繁殖し海藻を食べつくした状態）して藻場がなくなってしまうと、ブルーカ

ーボンによる二酸化炭素の吸収もなくなってしまうので、地球環境に深刻な影響をもたらす。では、解決策としてウニを捕獲して食べればよいと考えるだろうが、実は内臓がスカスカの瀕死状態のものばかりで食用にもならない。

私たちは、「ブルーカーボン」の再生を目指すという高い目標を掲げ、ウニの生態を調べ始めたが、長期的な観察が必要になるのでぜひこの研究を引き継いでほしい。

⑥テーマ：スポ GOMI

体を動かしながら街をきれいにすることをテーマに活動している。その中で制限時間内にごみを拾い、その重さや種類でポイントを競う「スポ GOMI」というスポーツに出会った。自分もスポ GOMI を企画・運営することを目的として活動した。

大会を開催するためのルールと必要な道具の確認、会場の選定を行った。広野町内のゴミが落ちている状況を調査したが、ゴミが落ちているような所はなく、打ち上げられたゴミがある広野海岸に設定した。プレ大会としてゼミのメンバー10名で実施した結果、大量のゴミを回収することができ、課題も明確になった。スポ GOMI を行っている NPO 法人に連絡を取り、運営するためのポイントを再確認することができた。今後は、もう少し規模を大きくしたスポ GOMI を開催したいと考えている。



⑦テーマ：葛尾村に人を呼ぶために

過疎化と高齢化の進んだ葛尾村に対して、多くの人に村の存在を知ってもらい魅力を発信したいと考えている。そのための活動として、ゼミ生を対象に葛尾村キャンプを実施した。参加者からは葛尾村の魅力に触れることができたとの感想をもらっていた。今後は、バイクのツーリングツアー実施のため、インタビューや動画撮影を予定している。

(3)課題と展望

今後もお互いが協力して、各グループの探究活動を進めていきたい。また、「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」を実現できるように継続的に努力していきたい。

2. 2. 3 アグリビジネス探究ゼミ

「地域の現状をビジネスや生業の観点から調査し、風評払拭や新たな地域活性化の方策について探究する。」を目標に活動している。

(1) はじめに

メンバーは6名で、スペシャリスト系列農業が5名（男子1名、女子4名）で、残り1名（女子）は、スペシャリスト系列商業の生徒で構成されている。テーマについては、個人または、グループで自由に設定させた。

(2) 実施内容

テーマ及びキーワードは、次の通り。

テーマ	キーワード	編成
檜葉の特産品をつくる	檜葉町、六次化産品、地域の活性化、風評払拭、さつまいも、ゆず	個人
オリーブを使って町おこし	六次化産品 オリーブ	個人
大熊町を応援しよう ～いちごやキウイを使ったスイーツ開発～	大熊町、六次化産品、地域の活性化、風評払拭、いちご、キウイ	個人
小麦アレルギーの人でも食べることができるお菓子作り ～米粉を使った食べ物～	小麦アレルギー、六次化産品、風評払拭、米	個人
美容を活かして食品廃棄物を減らそう ～おからの有効利用～	美容、六次化産品 おから	グループ

(2) 成果

① 檜葉の特産品をつくる

檜葉町の特産品である「さつまいも」を使用して商品開発を行った。株式会社マルト商事と連携し「さつまいもパン」を商品化し、市内のマルトで販売を行った。

今後は、檜葉町特産の「ゆず」を使用したお菓子の商品開発の予定である。



② オリーブを使って町おこし

広野中学校の御協力で、広野中学校グラウンドで栽培しているオリーブを収穫し、「オリーブを使ったラスク」を製造した。出来上がったラスクを広野中学校教頭やいわきオリーブプロジェクト代表松崎康弘氏に試食をしていただきアドバイスを受けた。今後、商品化に向けて継続研究中である。



③ 大熊町を応援しよう

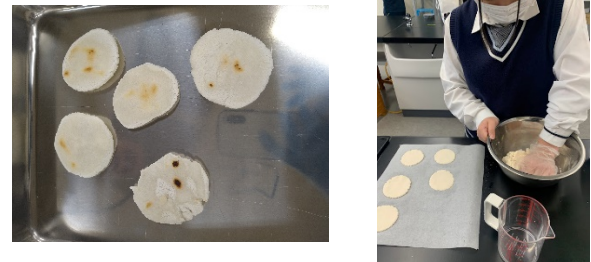
ネクサスファームおおくま徳田辰吾氏の御協力で、大熊町産のいちごをいただき、フルーツドライに加工して「いちごマドレーヌ」を製造した。「いちごマドレーヌ」は、大熊町で開催された「標葉祭」で販売し、アンケートを実施した。

また、HAMADORI 13の佐藤亜紀氏の御協力で、大熊町産のキウイをいただき、フルーツドライに加工した。今後、キウイを使用したマドレーヌを製造する予定である。



④ 小麦アレルギーの人でも食べることができるお菓子作り

フロンティア広野芳賀吉幸氏の御協力で、広野町産の米をいただき、煎餅を試作した。今後、商品化に向けて継続研究中である。



⑤ 美容を活かして食品廃棄物を減らそう

「おから」が美容に良いことを調べ、「おから」を使用したスイーツづくりを行った。今後試作を継続し、いわき内の豆腐店の店主にアドバイスをうけ、商品化を目指す。



(4) 課題と展望

自分で商品を企画し試作を行っているが、どうしてもレシピの完成度および製造技術が不十分で思うように進んでいないのが現状である。しかし、自分自身、失敗を繰り返して学んでいく姿勢が探究活動であると考えている。

少しずつではあるが、見た目や味について改善されてきており、確実に商品化に前進している。

これまでの活動を通して、自ら地域の方々とコミュニケーションを取り、原料を入手し、イベントに参加するなど、多くの経験を通して深い学びができたと考えている。

2. 2. 3. スポーツと健康探究ゼミ

東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故から12年を迎えようとしている。この12年の中には、避難指示区域の解除や常磐自動車道とJR常磐線の全面開通、ふたば未来学園高校と小高産業技術高校の開校、J-villageの機能再開、浪江町や富岡町、大熊町の居住制限区域の減少など、復興が進み、明るい話題が増えてきた。

一方で、震災や原発問題の余波もいまだに残り、不自由な環境で生活を送っている人々がまだたくさんいる。また、新地高校と相馬東高校が合併し、相馬総合高校になるなど、人口の減少には歯止めがかからない。さらに、未だ新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、震災からの復興を目指すスピード感に影響を与えた。

これらの地域課題に対して、スポーツを通して何ができるのか、について昨年までのスポーツと健康ゼミではアクションを行ってきた。しかし、ここ数年新型コロナウイルス感染症の影響で多くの人と触れ合ったり、一緒に活動するなどのアクションができず、思い描いていた探究活動ができていなかった。また、自分の得意とするスポーツを地域課題の解決のアクションとどのようにつなげていくかを考えていくと、活動の幅が狭くなり、充実した探究活動がやりくいことも課題となった。そのため、今年度から地域課題とスポーツを結びつけることの他に、自分自身の競技力向上にも目を向けた探究活動も可能ということとした。

(1) はじめに

スポーツを通して持続可能で豊かな地域の実現を探る他、競技力向上、障害の予防などトップアスリートとしての技術や体力向上に関する科学的見地からの探究と実践を行い、グローバルリーダーの育成を目指す。

(2) 実施内容

① 自分と向き合うためのアクション

自分は何に興味があるのか、「マイキーワード」を探るため、マンダラート、問いづくり、担当教員との座談会などを通して、自分の興味に合ったゼミを決める活動を行った。その中で、同じテーマに興味を持つ者同士でグループになったりしながら、自分の探究活動のテーマを決定していった。

② 調査、アクション

テーマ決定後も担当教員と対話を繰り返し、「このテーマのゴールは何か」「そのための仮説は何か」「どのようなアクションが必要か」など、探究の内容を深めていった。対話を繰り返す中で、テーマやグループが変わった生徒もいたが、それを否定せず、生徒の自主性を尊重して活動を進めた。

その後もアクションが思うように進まない生徒に対してはこちらから寄り添い、できる限り生徒主体になるような支援を心掛けてきた。

腰のケガを減らそう



腰痛に悩むバドミントン選手が多いことから、腰痛を減らすにはどのようなトレーニングやストレッチを行ったらよいのかについて、アンケートやインタビューを行った。

This is football

広野町にサッカーを広めるための活動を様々な方向から考えた。まずは男子サッカー部の活動や本校のサッカー場についてより多くの町民に知ってもらうためのアクションを立案した。



パフォーマンス向上とケガ防止のためのトレーニング

野球選手の投げる、打つ、などのパフォーマンス向上及びケガ防止のためのトレーニングについて、様々な文献や動画を元に検証を深めた。

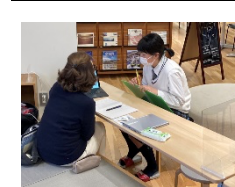


SKAメソッド

ロングキックの飛距離を伸ばすためには、どのような要素が必要なのかを探り、どんなサッカー選手でもロングキックの飛距離が伸びるためのメソッドの開発を目指して活動した。



メンタルの状況はスポーツにどう影響する？



自分の体験から、メンタルの状況がトレーニングやゲームにどのような影響を及ぼすのかについて探求を深めた。アプリを使用して自分の精神状況をグラフ化したり、専門家から話を聞いたりしたことをまとめた。

サッカー選手の補食づくり

サッカー選手に必要な栄養素が含まれた補食はどのようなものがふさわしいか、というテーマについて研究した。ゲームやトレーニング前に、何を、どれくらいとるとパフォーマンスを落とさずにプレーできるかなど、様々な文献を元に検証した。



日本選手と海外選手のバドミントンへの取り組みの違い

海外のバドミントン選手がなぜ強いのか、について興味を持ち、日本選手が海外選手に勝利するためには何を向上するべきか、日本選手と海外選手のバドミントンへの取り組みで何が違うか、インタビューやアンケートを通して検証した。

